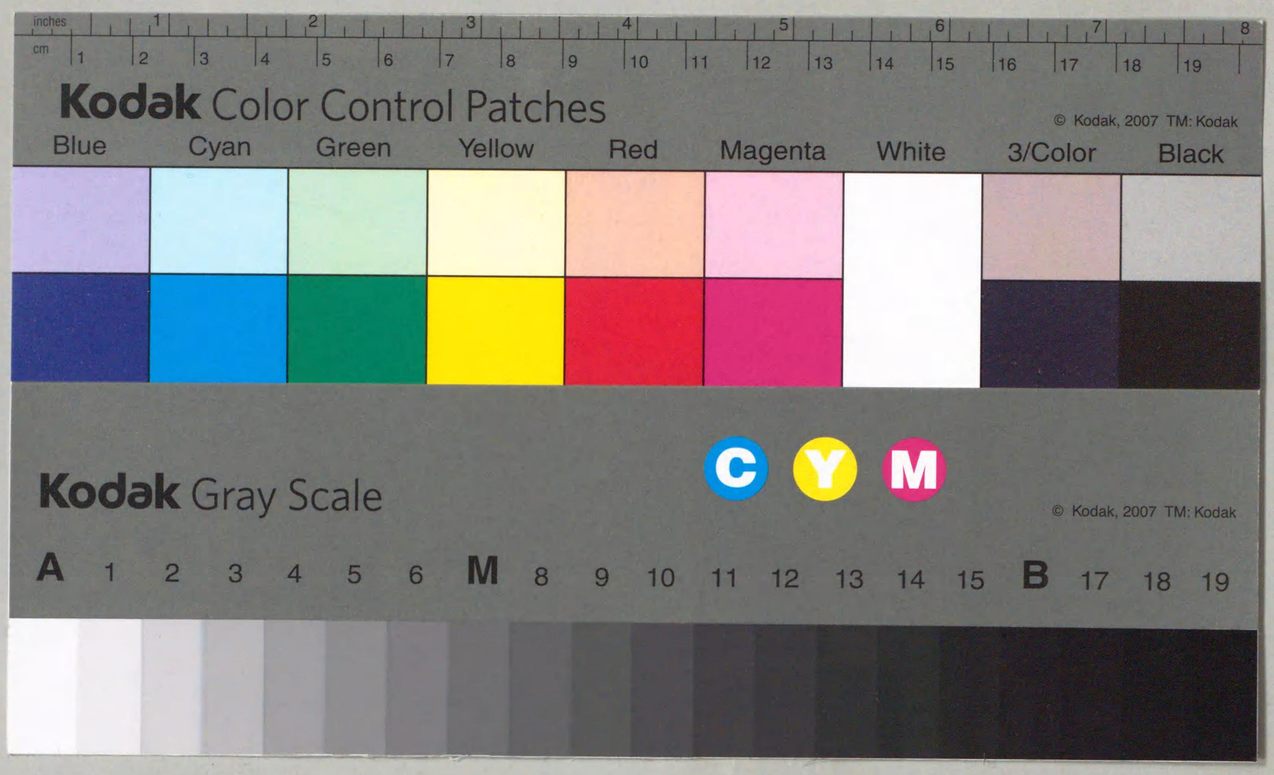


522.2
1858d
00038227

第九十六回講演集

工學博士 伊東忠太講演

道教思想と支那建築藝術

財團法人 啓明會

38

522.2
I858d

目次

開會の辭……一
『道教思想と支那建築藝術』……三
附錄　本會寄附行爲、職員名簿、出版目錄……一

財團法人

啓明會第九十六回講演集（昭和十四年十二月九日　日本工業倶樂部に於て）

開會の辭

本會理事長　侯爵　大久保利武

今日の講演會には、例の如く多數御來會を得まして、誠に啓明會の仕合せと存ずるのであります。

今回は『道教思想と支那建築藝術』と云ふ題に於て、伊東博士に御講演を願ふことに致したのであります。

御承知の如く、道教思想は支那國民性に深い根柢を有し、支那文化に大なる要素をなして居りまして、その要素が建築藝術の方面にも著るしく現はれて居ると云はれて居ります。私しが申すまでもなく、今日我が國民は新東亞建設の大事業に直面

38227

北京・紫禁城・大和殿（照參頁一四）

して居りますので、建築藝術を通して支那の國民性を研究し、又認識することは、極めて興味多きことで、また極めて緊要のことゝ思ふのであります。幸ひ斯道の最高の權威者である伊東博士が、本會の依頼を快諾せられまして、今日御互に博士の御講演を拜聽することを得るのは、誠に仕合せでありまして、御同慶の至りに堪へぬのであります。

伊東博士は我が會創立以來深い御縁故を忝なうして居りまして、已に度々御講演を御願致し、いつもながら、最も有益にして且興味最も深き印象を與へて下されることを、此の機會に感謝いたして、一言の御挨拶を申上げた次第であります。

道教思想と支那建築藝術

工學博士　伊東忠太

講演要目

一、序　言……（四）
二、藝術の根本義……（五）
三、道教思想……（七）
1、道教の主義……（七）
2、敬天思想との聯絡……（一三）
3、陰陽五行説との融合……（一七）
四、數の單位……（二一）
五、天圓地方と參天兩地……（三〇）
六、吉祥の觀念と象徴……（三六）
七、建築藝術に現はれた實例……（四一）
八、結　語……（五四）

一、序　言

此の度啓明會より私に『道教思想と支那建築藝術』と云ふ題で御話をしろと云ふ御命令でございました。御受けは致したのでありますが、私は元來道教研究家ではないのであります。但し支那建築に付ては若干研究もして居るのでありますが、建築を通して道教を見ることは相當出來るやうに思ひます。又道教を通して建築を見ることも相當に出來るやうに思ひます。是等の關係から若干此の問題に付いて考へました結果、道教と建築藝術との間に極めて密接なる關係があると感じましたので、今日は試みに其の一端を皆樣方に御聽きを願ひまして御高評を得たいと存ずるのであります。

二、藝術の根本義

本文に入ります前に、先づ藝術の根本義を簡單に申上げて置きたいと思ひます。一體此の藝術、建築も藝術の一つでありますが、藝術と云ふものはどうして出來るかと申しますと、申す迄もなく是は人間が頭で考へて手で拵へたものは總て藝術と言つて良ささうであります。若し此の頭が正しくて能く働いて、それに應じて器用に動かすことの出來る手があれば立派な藝術が出來る譯であります。頭が良くとも手が動かないとか、手が達者でも頭が惡いとか、頭も手も鈍いとか云ふ時に片輪な藝術が出來たり面白くない藝術が出來たりするのであります。然るに實際の世界を見渡しますと、完全無缺な頭で、申分のない立派な手で、立派な藝術を作り出すと云ふことは餘りないやうに思ふのであります。多くは何分か完美を欠いて居る、何處かに缺點がある、と云ふやうに考へられるのであります。之を支那に當嵌めて見ますと、支那の建築その他の諸藝術には一種獨特の面白味を感ずるのであります

が、同時に又非常に不思議な癖があることを感じます。實に奇癖の多い藝術だと私は思ひます。支那人卽ち漢民族の手は相當器用でもあり、頭の命令に從つて充分に手が動くのでありますから、支那藝術の奇癖は、その手の爲ではなくして、その頭から出て來るものと思はれます。私は支那の藝術品を見てさう云ふ風に直感するのであります。あの樣に癖の多い物を作り出す頭と云ふものは、餘程變な頭に違ひない。其の變な頭は何處から出たか、或は先天的のものか、或は他に原因があるかと考へましたが、結局是は道教思想と云ふものが最も重要なる原因を成して居ると信ずるに至つたのであります。無論其の外にも複雜な素因が入つて居るのでありませうが、殊に此の道教思想が主因をなして居ると信ずるのであります。玆に於て道教に就て少し考へて見る必要を生じたのでありますが、先程申しました通り、私は道教專門家ではありませぬから、道教の先生から御叱りを受けるかも知れませぬが、試に私の道教觀を一通り御話致しまして、それからそれを建築及び諸藝術に當嵌めて說明して見たいのであります。時間の許されまする範圍に於て、成べく簡單に筋道だけを申上げます。

三、道教思想

(1) 道教の主義

先づ此の道教とは如何なるものかと云ふことであります。是は常識的には誰でもよく知つてゐることで、今更說明する必要はないかも知れませぬが、道教の敎理と云ふ專門的の話になると、哲學の領分に入つて結局迷宮に入るかも知れませぬから、さう云ふ危險は冒さないのであつて、極く常識的に表面に現れた形の上から說明するのでありますが、道教の主義とする所は、一言にして申せば富貴長命であります。如何にして富貴を得べきか、如何にして壽命を延ばすべきか、如何にして生きながら神仙となり、如何なる事でも自由自在に出來るやうになり得るかを說くのであると言へます。さう簡單に言つてはいけないのかも知れませぬが、表面上さう云ふ風に見へるのであります。結局是は自己主義、物質主義、現世主義に墮したものであ

つて、實に淺薄な低劣なものであると、多くの知識階級の人から言はれて居るのであります。其の批評は兎も角と致しまして、漢民族には太古からさうした思想が發達して居たことが確かに認められるのであります。どう云ふ譯でさう云ふ不思議な思想が發達したかと云ふと、是は非常にむつかしい問題になつて、私共には其眞相は充分に分り兼ねますが、之を漢民族の先天的の癖であると一蹴してしまふことは如何かと思ひます。私は建築と結付けまして、其の重要なる原因の一つは、支那の土地の環境と國民生活、政治、經濟、社會狀態などの影響がさうさせたと見るべきであらうと思つて居ります。と申しますのは漢民族文化の發祥地は申す迄もなく北支那の黃河流域でありまして、其の土地は今日大分開發されましたが、太古の時代には黃土を以て蔽はれた茫漠たる平野と、樹木の少い山骨を露はした山でありまして、其處に集團を作つた漢民族と云ふものは、當然刻苦經營して働いて生活を營んで居つたに違ひない。一方に於てそれを支配する君主と云ふものは、極端な擅制政治を行ひ、生殺與奪の權力を以て國民に臨んだと云ふ狀態であつたかと思はれるのであります。

それはどなたも御承知の支那太古史の一節に、堯が自分の領土を視察に巡視して歩いた時に、百姓が『日出而作。日入而息。鑿井而飲。畊田而食。帝力何有於我哉』と言つて謳つて居る。勿論これは後世の史家の舞文であつて、眞實性の極めて乏しいものでありませうが、是が此の當時の一般國民の眞意であつたと見て宜しいと認めるならば、それは自分で井戸を掘つて飲み、自分で田を耕して食ひ、自力で生活して居るのであつて、天子からは保護されるではなし、又干渉されるでもなし、何も天子の御蔭を蒙つては居ないと云ふのでありますから、日本などとは大變な違ひであります。漢民族は自分で働いて自分で金を儲けて自分で樂に暮して行くと云ふことが人生の能事と考へ、國と云ふものは認めない。天子が誰であつても、國がどうならうとも、夫は自分とは沒交渉であるといふ樣な考へ方が、太古から發達して居た樣に思はれます。兎に角、此の自分と云ふものを如何にして保全して行くかと云ふことが國民の最大の問題であつたに違ひない。斯う考へて宜からうと思ふのであります。而して今のやうに、金は蓄めたい壽命は延ばしたいと苦悶して居る國民の弱點につけ込んで、國民の意向に投合するやうな教を創作したのが道教である。

人民の弱點の急所を掴んで、さうして宗教らしいものを作り上げたのが道教であると斯う私は解釋したいのであります。さう云ふ譯でありまして、實際道教思想は太古以來今日迄五千年來連綿として少しも衰へないで繼續して來て居るのであります。如何に道教思想が國民の精神を支配して居るかと云ふことが考へられます。勿論其の後孔子が出まして、道教のやり方はいけない、風紀に害があり、國家の爲によくないと云ふ譯で、人倫の正しい道を說かれたのでありますが、併し是は知識階級、所謂士君子の重要なる修養として尊重されて居るのでありまして、一般民衆とは殆ど沒交渉であつたかの如くに思はれます。從つて孔子の教へは所謂儒教として或る方面に普及されて居る間に、いつの間にか道教思想に浸蝕されて居ると云ふことが感じられます。其の後、後漢の張道陵（A. D. 125 —— 144）が天師道と云ふものを作り上げまして、自分は老子から秘傳を受けたと云ふやうなことを言觸らして、さうして所謂道教を宣傳したのでありましたが、それは恐らく近頃渡來した佛教と、その以前からの儒教に對抗する爲であつたと思ふのであります。それから其の後六朝時代に魏の寇謙之（A, D, 144 死）が又大に道教を宣傳しまして、到頭道教を立

派な宗教の形に組織しました。道觀と云ふやうな堂々たる伽藍を作り始めたのは矢張り此の寇謙之であらうと言はれて居るのですが、是はどう云ふ譯かと言ひますと、是は佛教に對する對抗であります。前の後漢の張道陵も道教を弘める爲には、勿論その直前（A. D. 67）に西域から入つて來た佛教と、孔子の儒教を抑へ付けなければならなかつたのでありましやう。それから今の寇謙之が道教を組織的に完成したと云ふのは、六朝時代に佛教が非常に盛になつて來たから、外來宗教排斥論を以て之に反抗し、佛教伽藍に負けない道觀、卽ち道教伽藍を大成したのであります。道教は古來他の宗教と戰つて今日迄來て居りますが、結局道教が勝つたのであります。勿論儒教は常識的のもので、怪力亂神を語らずといふのですから、道教や佛教とは全く調子の違つたもので、お互に喧嘩にもなりませぬ。佛教は高遠な教理を有つ立派な宗教でありますけれども、外來の新宗教ですから、所謂本木に優る末木なしとか言ひまして、結局開闢以來生拔きの道教には負けるのであります。假令一時佛教が非常に盛であつても結局は佛教は段々道教に侵蝕されまして今日では見る影もないと云ふ位に衰へましたけれども、道教は依然として少しも衰へない。恐らくは此

の道教は支那民族が滅亡しない限り永續するのではないかと私は見て居ります。是は餘談でありますが、この現象は印度に於ける宗教界の消長と非常に能く似て居ると思ふのであります。それは印度では五千年以前に既に梵羅摩教が出來て居りまして、これが卽ち後の印度教でありますが、此の宗教は非常に深く國民の頭に食込んで居りまして、如何にしてもそれは拔くことが出來ないやうになつて居ります。丁度二千五百年程前に釋迦が出て佛教を創めたり、其の前に耆那教と云ふのが出て來たりして印度教に反抗して立つたのでありますが、一時は榮えましたけれども、矢張り生拔きの印度教には對抗が出來ないのでありまして、佛教もいつの間にか印度教化されてしまひ、今日では御承知の通り印度からはすつかり驅逐されて、殆ど地を拂つて無くなつたと言つても宜いのであります。さうして印度教が獨り榮えて居る。此の現象が丁度支那の道教の現象と能く似て居るのであります。今日道教が如何に榮えて居るかと云ふことは、具體的に數字を以て示すことは因難でありますが、支那にちよい〳〵行つて見ました間に、支那の重要都市に於ける宗教建築の數を調べたことがあります。勿論徹底的ではありませぬが、大畧の所は見當が付くのであ

りまして、調べて見ると、相當大きな都市に於きまして、其の都市の宗教建築中に道教關係の廟祠が少くとも七十パーセントはあります。それから佛教關係の寺が先づ二十パーセント位だらうと思はれます。其の殘りが儒教、回教、基督教、その他に屬するものであると見られます。兎に角大多數は道教の建築であります。道教の建築と申しますと、非常に範圍が廣いのでありまして、一般の淫祠と唱へられるものでは、例へば娘々廟、財神廟、城隍廟等であり、自然物を神格したものでは、風神廟、雷神廟、火神廟、天后廟、奎星廟、魁星廟、五岳廟などがあり、其の外に古への帝王や功臣を祀るものに堯帝廟、禹王廟、關帝廟等があります。而して儒教の孔子廟さへも、今日では道教の道士が來て祭典を行つて居るので、事實道教の內に屬して居ると見られます。斯う云ふやうな譯で道教の勢力は古今を通じて少しも衰へないのであります。此の現象を見まして、如何に道教が支那國民思想を支配して居るかと云ふことが考へられるのであります。

それから更に御話しなければならないことは、道教以外に太古から支那にあつたと考へられて居ります色々な信仰、思想等と道教との關係であります。その信仰、思想は後世學説となり哲學となつたのでありますが、結局道教の道連れになつたのであります。或は道連れと云ふよりは相融和して一つのものになつたと云つても宜いだらうと思ひます。是は道教の感化力の非常に強いことを表明するものではないかと思ひます。

第一に擧ぐべき重要なものは敬天の思想でありましやう。これは元來多くの他の民族間にもあつて、珍らしくはないのですが、元來自然物を崇拜する思想で、所謂原始宗教といふべきものですが、支那では殊に天を敬ひ天を畏れると云ふ信仰があつたやうであります。自然物と云ふのは例へば、天地、日月、星辰、山川、草木其の他の有らゆる自然物及び自然現象を指すのですが、就中天を最も偉大なものと考へ、太陽を最も難有いものとして尊崇するのは當然であります。宇宙は天に由て覆はれ保護され、萬物は太陽に由て生育されると考へたからであります。この最高の天の命を亨け、天を代表して國土國民を統治するのが卽ち一國の君主であると考へられたもので、卽ち一國の君主を天子と稱する所以であります。天は絶對無限の神聖なものとされて居るのですから、その命を亨けて國を治める天子は亦絶對無限の勢力を有つて居らねばならぬが、其の代り又それに對するだけの責任も有つて居つたやうであります。例へば時に日蝕などがありますと天子は謹愼をしなければならない。是は天帝の怒りに觸れたものである。天子は天に叱られて居るのだ。斯う云ふ考で謹愼をしなければならない。或は又凶作があつたり、疫癘が流行したり、或は大地震があつたり、其他天變地異がありますと、是も天の御叱りであると云ふ譯で、天子は、これ朕の不德の致す所なりと宣言し、政治の惡い爲であるとして責任を負ひ、天に對して謝罪しなければならない。さう云ふ責任を負ふ位であるから、又其の勢力權威と云ふものも無限大である譯であります。餘談でありますが、三十七年前私の支那内地旅行の際に丁度日蝕があつた事があります。それは奥地の田舍でありましたが、其の土地の知縣が城隍廟へ參詣して神樣に早く天帝の怒りを解いて下さい、日蝕を早く解いて下さる樣にと御祈りを捧げて居りました。私はその直後知縣を訪問して、『貴國では日蝕の時神樣に御祈りを捧げるのですか』と問ふて見

た處、『勿論である、何國でも同樣であるべき筈だが、貴國ではどうするか』と反問しました。私は可笑しさをこらへて、『私の國では日蝕があれば天文學者が觀測する』と言つたが、何のことやら向ふには分らなかつたのでありました。支那では其の位に天と云ふものを崇拜して居るのであります。從つて建築の方から見ましても、支那全國を通じて最も雄大莊嚴な建築は何であるかと云ふと天子の宮殿であります。其の他のものは皆それに引摺られて行くのです。道觀、佛寺以下各種の建築の型は悉く宮殿建築に據つたものです。卽ち宮殿は生ける天子を本尊とする宗教建築であるといふことが出來るのであります。この適例は今も北京紫禁城の太和殿、乾清宮以下の諸殿に見られるので、雄大莊嚴を極めた殿の中央の寶座は、佛殿では須彌壇となり、寶座の上に坐する生ける天子は、佛殿では彫刻としての佛像となつて居る丈けの違ひがあるのです。

要するに、支那では宮殿が先づ發達して、道觀佛寺等は後れて之に追從して來たのですが、宮殿建築の意匠、設計、裝折、等は殆ど全部道教思想から出たものと言へるのであります。卽ち敬天思想から無上の高級建築を造ることを考へ出したので

すが、之を具體的に實現する爲には、道教的思想から出た手法に據つたのでありました。後に或る程度にこの實例を說明し度いと思ひます。

(3) 陰陽五行說との融合

それからもう一つ大事な思想問題として擧げなければならぬのは陰陽五行說であります。是も私はいつ誰が考へ出したと云ふことは存じませぬが、書經の洪範九疇に五行を記して水火木金土の順位を定めて居ります。これが漢代には旣に一種の學說にまで發展し、宋代に至て周濂溪が太極圖說(第一圖)を著し、五行說を哲學的に理論づけましてから、一般に重要視されたと見られて居るのでありますが、その所說の要綱は、此の宇宙の森羅萬象の根本は卽ち所謂太極で、其の太極が陰陽の兩儀に分れ、更に分れて木火土金水の五行に分れるというのであります。五行の順位に就は、て朱子の太極圖解に、

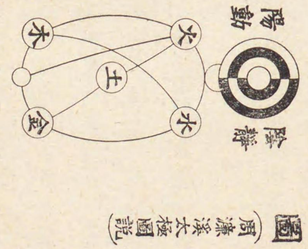
質を以てして其の生の序を語るときは則ち水火木金土と曰ふ。而して水木は陽

也、火金は陰也。氣を以てして其の行の序を語るときは則ち木火土金水と曰ふ。而して木火は陽也、金水は陰也。

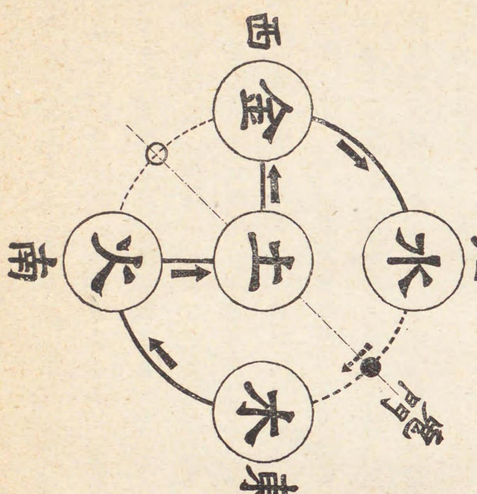
とありますが、今日は一般に木火土金水の順位に據り、その相生相剋の理に從つて萬物が運行し、禍福吉凶の現象が起るとするのであります（第二圖）。

要するに、之を數學的に解釋すれば、太極は詰り零でありまして、周濂溪の所謂『無極にして太極、太極は本無極なり』であります。而して陽がプラスで陰がマイナス、プラスとマイナスが綜合して太極の零に還元して行くのでありますから其の理窟は頗る面白いと思ひます。五行の中で木と火が陽であり、金と水が陰であり、土は其の兩方の中間にあります。例へば木が燒けて火を生じ、燒け終れば土となり、土より金を生じ、金から水を生じ、水に由て木が生ずるといふのは卽ち五行の循環相生の現象であるといふのですが、それを色々なものに附會して何でも五行々々で説明しようと云ふ所に大變な無理が出來たと思ひます。例へば五節、五色、五音、等を五行に配當するはまだしも、五味、五官、五臟、等に至ては隨分無理な考へと言はねばならないと思ひます（第三圖）。

第一圖　太極圖（周濂溪圖說）



第二圖　五行圖



第三圖　生化物萬

是が五行の圖であります。

此の木火土金水を方位に配當すると、最初が木で東に當るのであります、東は陽の初であります。それから火は南に當り陽の極であります。次に金が西に當り陰の初となり、終りに水が北に當り陰の極となるのです。而して土は中央に在て陰陽の中間と見られるのです。

この配當の原理は、東は日出の方位で天地初めて明るくなる處から陽の初とし、四季に配すれば恰も春の如く草木が萠え出づる感じに由て木に配し、色に配して青としたのです。次に南は日が南中して赫々として熱い感じを與へるから、之を火に配し、四季に配して夏とし色に配して赤とした。西は日沒と共に暗くなり冷やかな氣分であるから金に配し、色に配して白とする。金が白いといふのは、金を磨けばその光澤が白く感ずるからである。北は夜半で暗黒であり萬物悉く活動を停止する所から水に配せられ、色に於て黒に配せらる。水が黒いといふのは、水深くして停止するときは黒く見へるからである。さて中央は頗る附會の樣ですが、天の四方の中央ほ卽ち大地であると考へ、之を土に配しその色を黄に配したのであります。支

那に慣用されて居る青年、赤心、白玉、黒話、黄金などの用語が之に由て思ひ當るのであります。なほこの五色に就て、青は平和を、赤は富と幸福を、黄は皇帝卽ち威力を、白は寂寞を、黒は破壞を象徴すると考へられて居るのであります。

五行を年の四季に配するとき、木火金水をそれ〴〵春夏秋冬に當てるのは合理的ですが、土を如何にするかが六ヶ敷い樣です。これは四季に各〻土用といふものを作り、土用を土に配して解決して居るのですが、これはやゝ窮策の樣に思はれます。

さて、この陰陽五行說が國民の實際生活に應用されるやうになり、五行の運行が禍福吉凶を支配するといふに至つて終に全く道敎と融合したものと見へます。その具體的の說明は後に申し上げますが、例へば建築に於ては、日本に於ても所謂家相方位の迷信、轉居や旅行に方角や吉日を選み、結婚の條件に對手の生年の干支や月日を考慮する風習、その他種々雜多の卜筮類似の應用が漸次に行はれる樣になつたのは、結局道敎思想と陰陽五行說との融和の結果と見られるのであります。なほ次にその具體的事實を擧げるのですが、夫れには先づ支那に於て建築や工藝品を考案するに當つて、第一に必要なる數の觀念が如何であつたかを申し述べ度いのであります。

四、數の單位

凡そ藝術的物品を考案作製するに、第一に必要なのは計量の基本の問題です。例へば玆に一ッの机、一ッの箱、一ッの壺、何でもよいのですが、其形を具體的に決定するには、その長さ、廣さ、高さの比例を選定しなければならぬ。その比例は何を基準とするかといふに、大躰目分量で適當と思ふ所を押さへるのも一ッの方法ですが、或は何等かの約束を作つて、夫に準據するといふ方法もあります。而して支那では、太古以來三の數を尊重し、この三を基本とし、その倍數を以て處理して行く方法が行はれて居た樣でありますが、これは藝術的方面よりも、寧ろ總ての事物に共通して計量の原數として賞用されて居るので、その根本理由は亦た道敎思想に出てたものと解釋し得ると思ひます。

試に支那の古今各種の文獻に就て見ましても、三を單位とした數量が驚くべく多いのであります。少しく注意して文獻を御覽になると、五月蠅い程三の字又は三の

倍數の字が目につくのです。勿論三は支那以外の諸民族の間にも賞用されてゐる都合のよい數ではありますが、併し漢民族の如く濫用してゐる者はないのであります。

然らばその三の數は元來何處から出て來たかと云ふと、私は直感的に是は老子から來たのではないかと思ふのであります。それは御承知の如く老子に『道生一。一生二。二生三。三生萬物』と云ふことが書いてありますが、此の意味は頗る深長らしく、私には能く分らないのです。老子の眞意は老子に直接に會つて聞かなければ分りますまいが、私の考は斯うだらうと思ふのです。夫は、凡そ物は三と云ふ數に依つて初めて確定し、初めて固定し、初めて具體的の形が出來る。卽ち三が萬物を生ずると言ふ所以であると思ひます。例へば此處に空間に一點が在る。空間の一點はどうしてその位置を決めるかと云ふと、數學の方では或る一點に互に直角に會する前後、左右、上下の三軸を假想して、之に依つて此の一點の位置が決定されるのであります。又例へば數の一次元は線でありまして形のないものであります。二次元は面でありますから是も形を成さないのであります。三次元になると立體になるので、茲に初めて形が現はれて來るのです。或は又此處に物を立てるのに、一本の

脚では立たない。二本でも不安定である。三本あつて初めて安定して立つのでありまして所謂三脚であります。でありますから支那に於ける銅器の始まりは鼎であると云ひますが、その信僞は兎に角、あれが三本足になつて居ります。さう云ふ譯で、三と云ふ數に依つて物の形が具體的に現れ、物が固定する。老子が『三生萬物』と言つた內に、この意味も含まれてゐると思ふ。

この老子の說は頗る要領を得て居るので、廣く一般に普及され、道敎思想に凝り固まつて居る民衆も之を信奉するに至つたと想像されるのであります。前に申しましたが、後漢の順帝の時、張道陵が老君より秘術を授けられたりと稱し、天師道を創唱したと言ふので、結局老子は道敎の開祖に祭り上げられたのであると思ひます。支那の太古の歷史は勿論後世の人が揑造した傳說でありますから、之を正史として取り扱ふことは出來ませぬが、太古史に現はれた文字は道敎的臭氣が紛々として居るのを見ます。これは太古史を作り出した史家が、道敎思想に囚はれて居た爲であると解することが出來ると思ひます。私は茲に十八史略の劈頭に書いてある文章を實例として揭げるのでありますが、十八史略は元の曾先之の著で、低級なる初學者

の爲に作つた雜駁なる小史であるとして專門家は相手にしませぬが、私はそれが正史でなくとも、本問題に關する限り、適好の參考になると思ふのであります。十八史略の劈頭に『太古』と題し、左の通り記述してあります。

天皇氏。以木德王。歲起攝提、無爲而化。兄弟十二人。各一萬八千歲。地皇氏。以火德王。兄弟十二人。各一萬八千歲。人皇氏。兄弟九人。分長九州。凡一百五十世。合四萬五千六百年。

私は少年時代に十八史略を敎はつた時には、何のことやら少しも分らなかつた。近頃讀直して始めて釋然として分るやうに考へられます。劈頭第一に天地人の三皇を叙述したのは、天地人を三才と稱し、宇宙成立の順序とするに由るものであり、天皇氏が『以木德王』と云ふのは、陰陽五行說に所謂木が五行の最初であるから、之を以て最初の君主に配當したのであらう。兄弟十二人、各一萬八千歲。皆三の倍數であります。『地皇氏、以火德王』とは、火は五行の第二位であるから第二の君主に配當したと見られる。『兄弟十二人、各一萬八千歲』。是も同じく三の倍數である。人皇氏は『以土德王』と書くべき筈でありませうが書いてない。『兄弟九人、分長九州、凡一百五十世、合四萬五千六百年』。皆三の倍數である。能くも是だけ三の倍數を以て書いたものだと感服したのであります。それから次に五帝に入りますが、五帝の五は五行の五でありませう。先づ伏羲（十八史略に三皇の初代とする）を叙して『蛇身人首』。と言ふのですが、斯の如き妖怪的姿躰を案出する心理は慥かに道敎的だと思ひます。次に『以木德王』と書いてあるのは、天地人の三皇の時代が終つて、新たに皇國の朝が興り、伏羲がその祖であるから、五行の第一位の木德に配したものと見へる。次に『女媧乃鍊五色石以補天』とある。五色は前に說明しましたが、卽ち五行說から出た考へ方であります。次に神農になつて『人身牛首』。斯う云ふ化物のやうなものが續々と出て來る。又『火德王』とあるは五行說の木德王の次ぎに來る順序であります。それから第三番目が黃帝で『土德王』『制十二律筩』『雄鳴六、雌鳴六』『六律六呂』『鑄十二鐘、以和五音』。等の記事がある。土德は五行の第三位で、黃帝が三皇の第三位に當ることを示すものであり、その他の音樂に關する數字は例に由て悉く三の倍數であります。それから三皇の皇朝が滅び、新たに帝國が興りましたが、少昊から舜まで五代、何れも普通の人格で妖怪的化物でなく、記事にも甚

しい道教的怪談は殆ど無くなります。堯舜の傳は寧ろ儒教的思想を以て書かれたと見るべきであります。夫から帝國が亡びて之に替つたのが王國で、その第一王朝が夏、その最初の王が禹でありました。その傳記に、『開九州。通九道。破九澤。度九山。告厥成功』。皆九であります。次に『收九牧之金。鑄九鼎。三足象三德。以享上帝鬼神』。とありますが、同じく三の倍數又は三を以て徹底して居り、上帝鬼神で敬天と道教の思想を現して居ます。それから今度は第三王朝の周の時代になつて、宮城を作る法則が周禮に記錄されて居ます。是は最近の清國まで連綿として此の法則が傳つて居るのでありますが、先づ『匠人營國。方九里。旁三門。國中九經九緯。經涂九軌』。とあつて皆九の數になつて居ります。門の數は四方各三門で總計十二門になる、卽ち宮城の十二門。城壁は九里四方。城內の區劃が九經九緯、卽ち一條から九條迄、縱橫九つに區劃する法規は周の時代に出來て居ります。九軌と云ふのは車の幅を九つ並べただけの道幅です。一軌は八尺と書いてあります。結局九軌ですから七十二尺、是も三の倍數で七十二尺の道幅である。斯う云ふ風に三を單位とする道教的の考へ方と五を單位とする陰陽五行說の考へ方と、兩方混合して用ゐられ

て居ると見られますが、儒教の方にもこの考へ方が混入して居る樣です。例へば論語に孔子を叙して『弟子三千人。身通六藝者七十有二人』。とある。是は何を意味するか。是皆三の倍數であります。三千と云ひ七十二と云ひ六と云ひ、皆三の倍數であります。是は矢張り老子の言はれた『三生萬物』から出たと云ふてもよいと思ひます。

更に序に一言して置き度い思ひますのは、元來この三の倍數は決して正しい數量を現はして居るのではないのであります。例へば三千人と云ふのは本當に三千人と云ふ意味でも何でもなく、三千と云ふ文字は非常に多いと云ふ意味に解釋して宜しいのです。三千といふ語は隨分多く使用されて居ますが、白髮三千丈などと云ふのがありますので、支那人は非常な法螺吹であると呆れる人もありますけれども、實は白髮非常に長しといふ意味に過ぎないのであります。七十二と云ふのも甚だ多いと云ふ位な時に使ふ數字であります。可なり多いと云ふ時には三十六と云ふ數字を使つて居ります。三の倍數を使つた實例は、一々擧げたら、幾千萬あるか分らぬのでありまして、夫が日本にも非常に多く使用されて居ります。例へば明治初年まで

日本八十四國と云ひ、その前に六十六國と言つて居ります。支那は太古に九州に分たれ清國は十八省に倍加されて居ます。六十六、八十四、是は皆三の倍數でありますが、必ずしも六十六や八十四に分けなければならないと云ふ必要はなかつたのでせうが、不知不識支那の影響を受けて、好い數だと思つた結果であらうと思ふのです。それから越後の十八將、甲斐の二十四將なども同じ樣な例ではないかと思はれます。モー一つお話致し度いのは、私が大正十二年に琉球へ參り、縣廳に行つた時琉球に澤山の島があるが、幾つありますかと問ふたのです。所が誰も精確に勘定はして居ないが、昔から三十六島と言つて居るといふ答であります。三十六島は三十六峰、三十六殿、西域三十六國、等と同じことで、唯澤山あると云ふことの意味で三の倍數を用ゐた丈けで實數ではない。琉球の島の數は三十六よりも多いやうですねと申したら、或は五十四島とも言ふとの返詞でした。あとで考へたのですが、成程それは何でもないことで、三十六と七十二を加へた百八を二で割つた數です。日本でも昔奥州五十四郡と言はれた例もあります。

さて、然らば建築や諸工藝品の考案も、悉く三又は三の倍數で徹底して居るかと

申すに、これは必しもそうではない樣であります。勿論私は多くの建築物や諸工藝品を精確に測定しては居らぬのでありまして、精確な資料に乏しいので、今日結論に達することは不可能でありますが、建築の配置、房室の區分などが原則として三を基準として居ることは確實であります。併し細部の取扱ひ方は必しも嚴正に三に從つては居らぬのです。例へば柱の長さはその直徑の九倍、十二倍、十五倍等限つて居ない。殆と三の倍數に近いのもあれば、遠いのもあるのです。又例へば扉の考案で、之を上、中、下の三分に區分し、上と下を羽目とし、中を格子とし、又その格子の部分を上下三段に區分するといふ樣な徹底したのもありますが、同時にこれとは全く違つた考案のものもあるのです。扉の形にしても、その高さが幅の三倍に當る例もありますが、當らない例も澤山あります。要するに、無形の文字の上では三で徹底しても、有形の實物の上では必しも徹底はしていないと言ふことになります。

工藝品に就ても同樣であります、例へば壺や瓶の高さが口徑の三倍が標準であるとは限らず、盃の口徑が高さの三倍であるとも限らない。但し例へば鐘、磬の如き

古來一定の割り方が記錄されて居るのですが、これとても必しも三を單位として押し通してゐるのではなく、割り切れない數字が出て來るのです。これ等の研究は恐らくは未だ充分に完成しては居らぬと思ひますが、何分甚だ面倒な微妙な問題でありますから、茲には私も確信を以て申上げ兼ねるのであります。

五、天圓地方と參天兩地

建築や諸工藝の設計圖案の原理に就きましては、研究不充分で、靴を隔てゝ痒きを搔くが如き憾がありますが、支那では古くから圖案の根本原理は天圓地方と參天兩地であると言ふて居るのです。これは易から出た言葉で、支那一流の謎の樣な話ですが、試に之に就て少しくお話しを致します。

元來物の形は線に由て限界されるのですが、線には直線と曲線があり、曲線に由る最單純なる形は圓周であり、直線の最も簡單なる形は矩形であります。その圓と方形が總ての形の基本で、その變化と綜合に由て萬象の形が出來ると考へ、圓を天に配し、方を地に配して天圓地方と稱したものと思はれるのです。然るに、天の圓いのは論が無ひが、地が四角であると考へた理由が分らぬのです。若し天が地を覆ふならば地も亦た圓くなければならぬ筈であります。之に就ては古來いろ〳〵な解釋がありますが、何れも牽强附會であると思ひます。近頃小柳博士の御說を聽きましたが、博士の言はるゝ所は大體次の樣な意味であります。

易の說く處に由れば、天は陽で『一』の數を以て表はされ、地は陰で『二』の數を以て表はされる。而して圓は直徑の一元さへ分ればその形が自ら定まるから、天は圓で一である。方卽ち矩形は縱と橫の二元に由てその形が決定されるから、地は方で二である。但し矩形が縱橫同長の正方形であれば、一元化する譯であるが、『天圓地方』と言ふ場合の『方』は一般に矩形を指すので、必しも正方形に限るのではない。然るに後世『地方』を『地は正方形なり』と曲解した爲に說明が困難になつたのである。

この小柳博士の說明に由て大躰諒解し得た樣でありますが、まだ完全に合點し難い所もある樣に思ひます。兎に角、實際に於てこの天圓地方の原理に由て考案され

た藝術的作品は澤山あるのです。夫は後に説明致します。

その次に參天兩地ですが、これが亦た甚だ難解なものです。若し一天兩地ならば、前述の天圓地方と同身一體でありますが、參天とあるのが問題です。之に就て、宋の張横渠著正蒙の參兩篇第二に

地の兩たる所以は、剛柔男女を分つて之が法を效す也。天の參たる所以は、太極兩儀を一にして之が性を象る也。一物にして兩體なるは氣也。一、故に神なり。兩、故に化す。此れ天の參たる所以也。

と解釋されて居りますが、大體分つた樣でもありますが、明確には分りませぬ。結局參天の三は太極、陰、陽の三であり、兩地の兩は陰陽の二であると解せられる樣ですが、それではまだ腑に落ちませぬ。

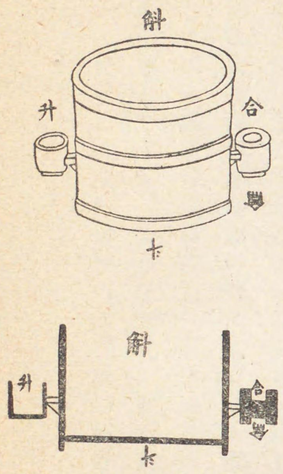
この參天兩地が總ての考案設計の基準となるといふ説に就ては、晉書卷五十一摯虞傳に、將作大匠陳勰なる者が地を堀て古尺を得た事から、尺度の復古論者と非復古論者の間に論爭が起り、摯虞は復古論者として次の如く陳べて居ります。

昔聖人有以見下之賾、而擬其形容、象物制器以存時用、故參天兩地、以正算數

第三圖

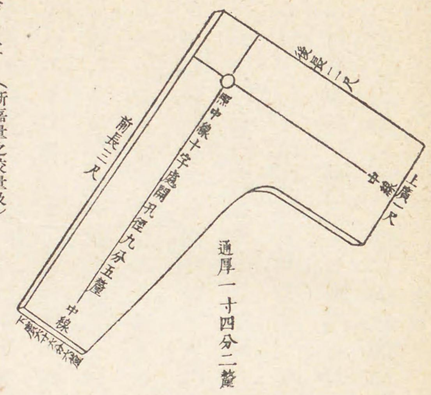
太極 TAI-CHI (GROSSE MONADE)	兩儀 DUALE PRINZIPIEN	五行 FÜNF ELEMENTE	色 FARBE	色の意義 BEDEUTUNG DER FARBEN	方位 HIMMELSRICHTUNG	四季 JAHRESZEIT
	陽 YANG (POSITIVE)	木 HOLZ	青 GRÜN	平和—繁榮 FRIEDE—GEDEIHEN	東 OSTEN	春 FRÜHLING
		火 FEUER	赤 ROT	富貴—幸福 REICHTUM—GLÜCK	南 SÜDEN	夏 SOMMER
		土 ERDE	黄 GELB	皇帝—威力 MONARCH—GEWALT	中央 MITTE	土用 "DOYŌ"
	陰 YIN (NEGATIVE)	金 METALL	白 WEISS	寂莫—悲哀 DÜSTERHEIT-TRAURIGKEIT	西 WESTEN	秋 HERBST
		水 WASSER	黑 SCHWARZ	破壞—滅亡 ZERSTÖRUNG—VERNICHTUNG	北 NORDEN	冬 WINTER

第五圖



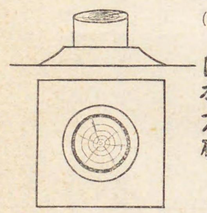
嘉量（新嘉量之校量及推算劉復）

第四圖



頌磬圖（律呂精義　石晉之屬　朱載堉）

第七圖

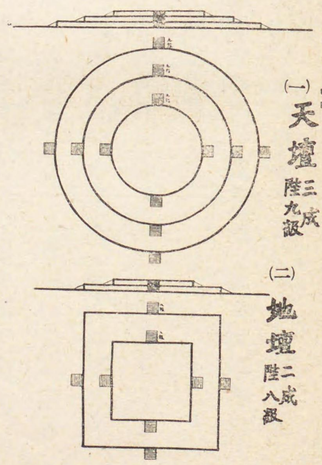


天圓地方

（一）圓柱方礎

（二）方榱圓榱（地天泰）

第六圖



參天兩地

（一）天壇三成陛九級

（二）地壇二成陛八級

之紀、依律計分、以定長短之度、其作之也有則、故用之也有徵、考步兩儀則天地所隱其情、準正三辰則懸象無所容其謬、施之金石則音韻和諧、措之規矩器用合宜、一本不差而萬物皆正、及其差也事皆反、(下畧)

卽ち參天兩地の法に準へば萬物皆正しく、よくその用途に適すといふのであります。例へば古への磬は圖の如き寸法に由るので、長邊は三天に當り、短邊は兩地に當るので、よく音律に合ふと解するのであると思ひます(第四圖)。又例へば嘉量は古への量器ですが、圖の如き形で、斛、升、合の三種の枡は上に向つて參天であり、斗、龠の二種の枡は下に向つて兩地であると解せられるのであります(第五圖)。

建築關係の物にもこの法則が認められます。その適例は北京の天壇でありますが、これは圖の如く三重の圓い壇を重ねたもので、階の段數が九段になつて居るのです。天壇は天子が毎年冬至の日に親ら天を祀る爲の壇であります。それで參天の意義に從て、天に象る圓狀の壇を三重に築き上げたのであります。それから北京城の北に地壇がありますが、これはプランが四角で二重の壇になつてゐますが、階段が八段しかない。二は陰の初數、八は陰の極數でありまして、卽ち參天に對する兩地の意

義を表したものであります。つまり天壇は三の倍數、地壇は二の倍數で設計したものと見られるのです（第六圖）。

次に天圓地方の實例の一二を擧げて見ますが、茲に四角な礎石があつて其の上に圓い柱が立つて居ります（第七圖の一）。卽ちこれも天圓地方であると云へるでせう。四角なものゝ上に圓いものを戴せる例は無數にありますが、何れも天圓地方の性質であります。但し之に反對の現象が現はれて來る實例もあるのですが、夫は例へば軒の垂木の打ち方であります。少し大きい建築になると垂木が二重に出て居る。卽ち二重垂木であります。日本の神社佛閣や宮殿の軒もそれであります。日本でも、奈良朝時代の古い建築を御覽になると、地垂木といふ下の垂木が圓く、飛椽垂木といふ上の垂木が四角になつてゐるのが澤山あります。勿論支那には今日でもこの型が盛に行はれてゐます。さうすると是は天圓地方ではなくして天方地圓となるのであります。これはどう云ふ譯かと申せば、是は易の卦で說明が出來ると敎へられました。それは『地天泰』と云ふ卦でありまして、天は上へ〳〵と浮ぶ形であり、地は下へ下へ〳〵と沈む形であるから、天地が離れる象になるが、それを逆に置くと、

天は上に昇ろうとし、地は下に沈まうとして、天地が接近して相和すといふ理窟だそうであります。成る程これは一理あると思はれます（第七圖の二）。

もう一つやゝ異なつた例を擧げて見ます。夫は北京の宮城內の佛殿や、滿洲國承德の熱河離宮の佛堂などの中に在る佛具としての小塔でありまして、いろ〳〵な變つた形の塔がある內で、殊に面白いと思ひましたのは、一種の三層塔であります。その第一層は、プランが四角で二重の屋根があり、第二層はプランが八角で同じく二重の屋根があり、第三層はプランが圓くして三重の圓屋根があるのです。この初層の四角は地の方に象り、第二層の八角は地の八方に象り、第三層の圓は天の圓に象つたものに相違なく、しかも第三層の屋根が三重で、第二第一兩層の屋根が二重であるのは、疑ひなく參天兩地の原理に準つたものと見へます。卽ちこれは天圓地方と、參天兩地を同時に現はしたのであると解し得るのであります。同時に又之を以て佛敎乃至喇嘛敎に支那古來の敬天思想、陰陽五行說、道敎思想等が深く浸潤して居ることを知るのであります。

六、吉祥の觀念と象徴

それから其の次には吉祥と云ふことを御話したい。支那人が何を作るのでも、建築は勿論些細の小道具に至る迄吉祥と云ふことに非常に注意をするのであります。それは何等か目出度い事物を形に現してそれを何にでも適用するので、凡そ支那の事物に此の吉祥思想の入つてないものは一つもないやうに思はれるのであります。若し支那の藝術から吉祥を除いたらば製作が出來ないのではないかと思ふ位であります。此の吉祥の觀念は何處から出るかと云ふと、是は申す迄もなく道教の思想としまして富貴長命を希ひ、好いことを希ひ歡樂を希ふと云ふ思想が出て來て居るのです。それに絡んで陰陽五行は勿論、種々雜多な迷信、緣起、禁厭、附會等の考が入つて來ました。例へば先きにも申しました通り、色の取扱ひにしても、黄色は皇帝或は威力を意味するのですから格別として、青と赤は陽の色で吉祥の意味があるのですが、白は陰の色で寂莫悲哀の象徴ですから裝飾的には使用されず、喪の時に

使はれる位なものであり、黑は陰の極で破壞、滅亡の象徴ですから、是も緣起が惡ひとして使はれませぬ。結局黄青赤の三原色を使ふのですが、黄は皇帝の色として、昔は濫用することを遠慮したらしく、殘る青赤を思ふ存分に用ゐることになつたのです。青は平和、赤は富貴の色ですから之を賞用するのは當然の事で、殊に赤を濫用するのは必然であります。昔し外國人が、支那で赤い色を濫用するのを見て、色に對する趣味の低級である爲だと思ひ、小兒の如き原始的趣味だと評したのは非常な見當違ひであつたのです。

色に對する觀念は、日本でも奈良朝時代までは支那と全く同樣であつたと見へます。矢張り赤と青を主色とし、その他は副色として取扱つたのです。奈良の枕言葉に『青丹よし』と言ひ、傳彩を『丹青』と言ふが如きは、畢竟赤と青が最も好い色で、同時に最も美しい色であると考へられたのでありませう。奈良の都の市街の家々が赤と青で光り輝いてゐたであらうと思はれるのは、聖武天皇が、その宮殿は勿論、五位以上の官吏の家、並びに庶民にして之に堪ゆるものゝ家は、塗るに丹堊を以てし、葺くに瓦を以てせしめられた事に由て想像されるのです。その後桓武天皇

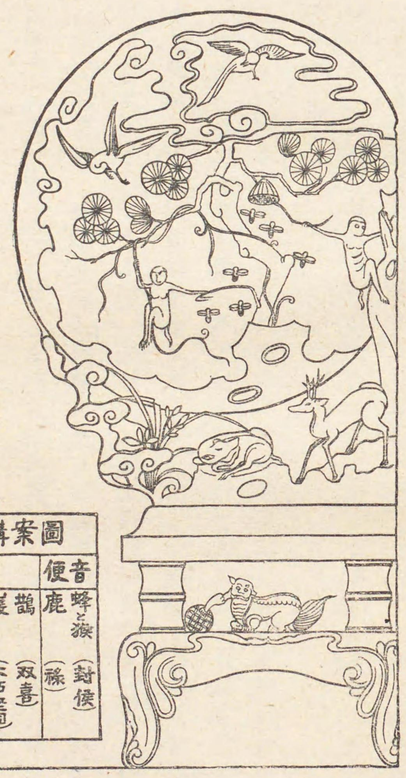
の大極殿の記錄に『丹楹碧甍』『朱欄青瑣』とあるに徵しても、大極殿が赤と青の强烈なる對照に由て、眩ゆい迄に輝いて居たことを知るのであります。

さて吉祥を具體的に現はす手段は幾通りもあるのですが、第一は、富貴長命といふ樣な無形の言葉は、音便に由て之を有形な物で象徵し代表させるのです、私は假に之を音便法と名けます。例えば幸福を祝する場合に蝙蝠を以て象徵するのですが、蝠は福と同音であるからです。さうしてそれを描くなり、彫刻するなり、染織に印畫に、凡ゆる方法を以て各種の物に適用します。その他音便に由る吉祥の材題中、最も普通に行はれ居る數例を擧ぐれば、

(1) 鹿　祿に通ず　(2) 鯉　利に通ず　(3) 鯰　年に通ず
(4) 魚　玉に通じ又餘に通ず　(5) 金魚　金玉に通ず
(6) 羊　祥に通ず　(7) 大橘　大吉に通ず　(8) 芙蓉　富に通ず
(9) 水仙　仙に通ず　(10) 扇　善に通ず　(11) 瓶　平安に通ず
(12) 磬　慶に通ず　(13) 卍　萬に通ず　(14) 蜂と猴　封侯に通ず

この中封侯を祝する爲に蜂と猴を借りた好例が日本にあつたのを誰も氣が付かな

第八圖（蜂猴之圖）



吉祥圖案

長崎福濟寺青蓮堂大觀門前石鼓

東方文化學院研究員　飯田須賀斯　發見

圖案構成材題

音便	會意
蜂と猴（封侯）	
鹿（祿）	
	鶴（双喜） 巖雲松（不朽堅固）（祥瑞） 蘭（常綠） 靈芝（芳香）（祥瑞）

かつたやうでしたが、東京の東方文化學院研究所の研究員飯田須賀斯君が數年前に長崎福濟寺の石鼓に在つたのを發見して來られたので、非常に是は面白いものでありますから、特に之をお目にかけた譯であります（第八圖）。なほ、この蜂猴の圖に鹿、鵲、巖、雲、松、蘭、靈芝、などが巧に配合されて居りますが、何れも吉祥の偶意を示すものであります。

次に會意法といふのがあります。これは或る吉祥の事柄を或る有形の動植物等の性質に附會し、聯想に由て意味を傳へるといふやり方であります。例えば多子卽ち子寶といふ吉祥を象徴する爲に柘榴を使ひますが、熟した柘榴を割つて見ると、中に實が澤山入つて居る。それで子が澤山出來ると云ふ祝福の意味で柘榴を使ふ。その他鵲は喜を、鶴は長壽を、桃は長壽と同時に鬼を退治すると云ふ信仰からよく使ひます。是も道教から出た事で、日本でも桃太郎が鬼退治をすると云ふ童話は詰りそれから出たものであります、之に關聯して茲に斯う云ふ（靈）變な字があります。是は鬼の幽靈だと云ふのです。人間が死ねば鬼（日本で言ふ幽靈）になる。其の鬼は人間に取つては非常に怖いものである。鬼が死ねば靈になる。だから人間が鬼を

怖がるが如く鬼は霊を怖がらなければならない。卽ち此の字を書いて門に貼つて置くと鬼が來ないといふので、一寸面白いと思ひます。會意に屬する他の數例を擧げて見ると、

(1) 鶯　朋友の道
(2) 鶺鴒　兄弟の道
(3) 鴛鴦　夫婦の道
(4) 松　長生
(5) 竹　君子
(6) 梅　佳人
(7) 牡丹　富貴
(8) 杏花　進士及第
(9) 靈芝　不老
(10) 萱草　憂を忘る
(11) 獅　辟邪
(12) 雲　祥瑞

などなほ澤山あります。この外謎語畫題と稱して、繪畫や圖樣の題材に各種の吉祥物件を、音便又は會意、或は音便と會意を取り合せて取扱ふ例が甚だ多いのであります。例へば百事大吉と題して百合、柿、橘の取合せを作るのや、一笑圖と題して竹の下に犬を畫くと云ふが如き遊戯的な意匠を喜ぶの風もあります。

支那人は古來文字を尊重する癖がありますが、所謂吉祥文字は特に好愛し、之を圖案化して何にでも適用して居るのです。その文字は例へば福、壽、富、貴、祿、

吉、喜、囍、丁、文、天、豐、樂、等で多くは左右同形の字畫ですから圖案には簡便であり、之を窓の格子などに適用するに都合がよいのです。字畫の變化は實に自由自在で、例へば百福百壽と云ふ位ですが、福壽の變形は恐らく百種以上でありませう。なほ吉祥文字の取扱ひ方は實に千種萬樣で、到底お話しになりませぬから、今日は是だけにして置きます。

七、建築藝術に現はれた實例

これから建築を中心としての實例の二三を申し述べませう。建築では北京の紫禁城の宮殿が最も適好であると思ふのです。なぜかと申しますと、北京の紫禁城は天子の宮城でありますから、天子の尊嚴を保つと云ふ意味で、昔からの敬天思想が當然現はされる筈でありますし、又陰陽五行の考も當然加はりますし、又一般民衆の道教思想も勿論之に參加して來る譯であり、總ての條件が之に集中されねばならぬからであります。本來は幻燈で御目に掛けたかつたのですが、其の準備が出來なか

つたので、御分りにくいかも知れませぬが口頭で説明致します。（口繪參照）

一體天子の宮城と云ふものは、既に申上げました通り、太古の時代から「方九里旁三門。國中九經九緯、經涂九軌」といふ法規を標準として來たので、後世若干の變遷はあつても、根本義は失はれて居らぬのです。日本でも桓武天皇の平安京、其の前の平城京も支那の古式に據つたのであります。支那では歴朝の宮城のプランに多少の異同があつても、大體古式に據つたのですが、まだ完全に研究され盡しては居りませぬから、今その歴史的變遷を申述べることは困難であります。現在の北京城は、既に餘程古式を失つて居るのですが、大體の方針は依然として古式を傳へ、城の輪廓は大體矩形であり、大小の街路は略ぼ整然として經緯の線に從て配置されて居るです。此の北京城は明の永樂十五年（A. D. 1417）に作られたので、其の前に元の都が至元四年（A. D. 1338）に造られてあつたのを、北の方を一部分切り縮めたので形が變つて來たのです。元都の前には金都があり、又その前に遼都があつたのでありました。さう云ふ譯で、今の北京城は古來幾變遷して居りますけれども、大體のプランの原理は變らないのであります。

北京城のプランの組織は、周圍約四十清里の内城を第三匣とし、その中に第二匣の城を築いて之を皇城とし、更に皇城の中に第一匣の城を造つて之を紫禁城と云ふのです。日本流に言へば、紫禁城が本丸、皇城が二の丸、内城が三の丸で、平安京に譬ふれば、内城は平安京、皇城は大内裡、紫禁城は内裡であるとも言へるのです。城郭の三匣は矢張り道教の三の數で行くのであります。紫禁城は正しく南面し、東西二百二丈九尺五寸、南北二百三十六丈二尺の矩形で、この地域を縱に三つに區劃し、その中央部は所謂九重殿門の朝廷であり、左右は帝室の各種の宮殿樓閣及び側近の内官等の舍屋を以て充たされて居る。中央部の九重殿門とは例の三の倍數で形容したのではなくて、現實に九重になつて居るのです。勘定の仕方に依つては十重とも見られますが實は九重になつて居る。其の九重は又朝と廷と二つに分れて居りまして、表の南の部分が朝、裏の北の方が廷でありまして、之を外朝内廷と言つて居ります、其の外朝の方に五つの殿門があります。即ち正面入口の午門から、大和門、大和殿、中和殿、保和殿まで五宇の殿門が一直線の軸の上に整列し、内廷には乾清門、乾清宮、交泰殿、坤寧宮の四宇が前後に竝び、合計九宇九重に配置されて

居るのであります。此の九重の殿門の中で最も重大にして莊嚴なのが大和殿と云ふ重層四阿の大建築であります。その間口は十一楹（楹は柱と柱との間）で百九十九尺四寸、奥行は五楹で百十尺七寸、内外極彩色で屋根は黄色の釉瓦で葺いてあるのです。屋根の瓦の黄色であるのは、前に述べました事ですが、黄は皇帝の色だからであります。それから屋根の大棟の兩端に正吻、（又蚩吻）日本で謂ふ鯱のやうなものが付いて居ります。あれは日本では火災を禁厭する爲めに海中の動物である鯱を上げるのだと解釋して居りますけれども、其の根本はさうでなくして、元來鳥から出發して終に魚に似た形に變化したものとするのが正しい樣です。法隆寺の玉蟲厨子を御覽になつた方は御承知でせうがあの屋根の兩端に在る蚩吻も鳥の羽根の變化と見るべきでありませう。支那では太古から鳥を以て太陽を象徴する信仰があつたので、兎と烏で月と日を代表して居りますが、必しも烏でなくても、兎に角鳥は太陽を象徴すると言はれて居る。卽ち天子の宮殿は勿論、高級の殿堂は鳥又は鳥の變形を屋根につけることになり、終にそれが變化して魚に近いような怪奇な動物になつて一般に濫用されたと思はれます。それから大和殿内の中央に寶座が据えてあ

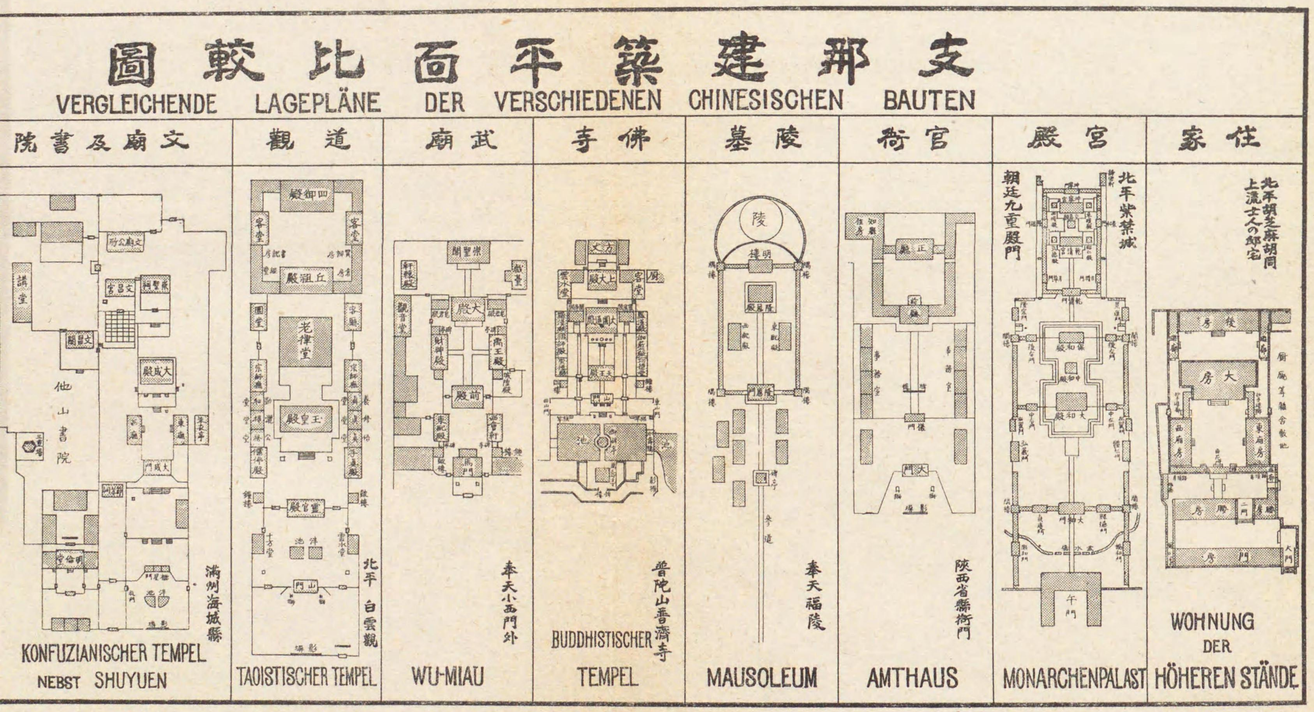
つて前面に陛が三つ付いて居る。所謂陛三出と言ふのです。それから大和殿は、後の中和殿、保和殿と共に、廣大な三成の壇の上に聳えて居り、壇の前面に三出の陛があり、陛を夾んで十八の鼎がある。それは各成の壇の陛の兩脇から、一番上の壇の上面に開展する平らかな前庭卽ち丹墀の上迄ずつと並んでゐるのです。昔夏の時代から宮殿に九つの鼎があつたので、所謂九鼎大呂の九鼎であります。これは前にも申しました通り禹が九州を分つたといふ譯で九鼎を作つたのでありましたが、清朝は十八省を分つた爲に十八鼎となつたのです。此の鼎は何の意味であるかと申せば、これは天子の位を象徴する爲でありまして、この鼎がなければ天子の位には就けないとされたものです。周未楚の莊王（B. C. 613—591）が人をして鼎の輕重を問はしめたといふのは、詰り周を滅ぼして自分が天子になりたいが、併し鼎がなければ天子になる譯に行かない。周の王宮の鼎を奪はなければならぬが、どの位の重量だらうと人をして問はしめたのですが、今日の鼎は直徑約六尺、高さ蓋頂まで約七尺餘ですから、一個の重量は約七八百貫はありそうです。それから丹墀の左右の前端に日圭、嘉量と云ふものが對立してゐます。日圭と云ふのは日時計でありまし

て、圓い白石の盤を作つてそれを斜に置き、その中心に針を貫通したもので、太陽の位置に從つて針の影が盤上に移動して行く、それに依つては時刻を知るのであります。嘉量のことは前に說明しましたが、あの枡を、白石で作つた燈籠の樣なものゝ中に入れてあつたのですが、今無くなつて居ります。要するに天子は時を正し枡を正して國を治めると云ふ責任を有つて居るので、時と量の標準を示す意味であります。それから此の日圭嘉量の後方に青銅の鶴が一對龜が一對、是は聖壽萬歲を祝福する爲のものと考へます。それから金缸が二對、是は鍍金の大きな缸でありまして、それが殿の左右にあります。是は寶祚無窮と云ふことを象徵するものでありまして、缸は甌と同義であり、所謂金甌無欽と言はれるあの金甌でありましやう。それから殿の內部には、中央に寶座の臺が据えてあつて、その上に椅子があり、そこに天子が倚座するので、その後に木彫の美しい屛風が立ち、その前には幾對かの香爐や置物が竝ぶのであります。これ等の光景を見て誰でも感じますことは、是は人間の爲めの設備とは思へない、何か神樣か佛樣かを祀る殿堂でなければ恰好が付かぬといふ事です。數々の特殊の儀飾の道具立てを見れば、之は何等か宗教的祭祀を行ふ聖

殿で、到底人間生活の爲めの建物とは思へませぬ。私は之を一つの宗教的建築と見て宜しいと思ふ。否支那の本當の宗教建築は是であると思ひます。後世支那に佛教が入つても回教が入つても、其の建築は宮殿の建築を殆と其の儘そつくり踏襲したので、別に特殊の建築を創案したのではない。大和殿の寶坐の上へ釋迦を置けばそれで立派な佛殿になる。さう云ふ譯ですから支那には特に宗教建築と云ふものはないのであります。要するに支那に宗教建築なし。若しありとすればそれは天子教であると言つて宜しい。それでありますから、是も餘談ですが、日本に佛教が入つて寺が建つたが、その建築樣式は支那の寺の眞似であると云ふ人がある。併し支那には佛寺建築と云ふ特殊の建築樣式はない。あれは宮殿建築の樣式を襲踏したのであるから、正しく言へば日本の佛寺の型は元來支那の宮殿の型である。故に宮殿佛寺は同型である。其の證據には、桓武天皇の御造りになつた大內裡の太極殿は宮殿ではあるが、丹楹碧甍、屋根は四阿にして棟に蛮吻を上げた姿は佛殿と同型で、南都唐招提寺の金堂などと大體に於て同工異曲である。

そこで此處に支那建築平面比較圖と云ふものを作つて置きましたが（第九圖）、

第九圖



支那の住家、宮殿、官衙、陵墓、佛寺、武廟、道觀、文廟及書院、淸眞寺（卽ち回教寺）等のプランが皆同じ方針で出來て居る。型は一つしかない。その中心となり標準となるものは天子の宮殿で、あとは皆之に追從して居ります。實に不思議な現象ではありませぬか。

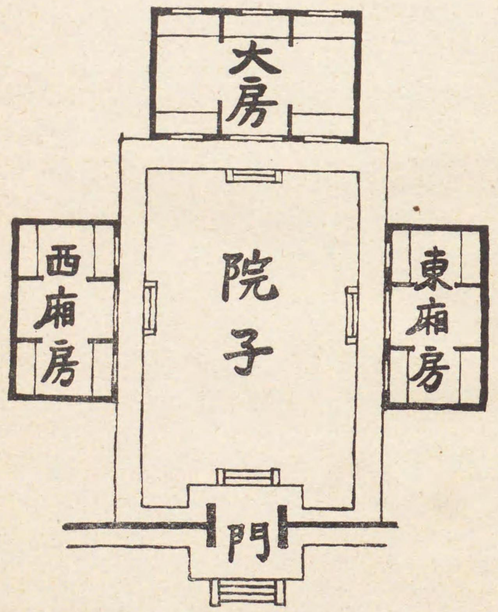
此處に擧げましたのは、是は住家の單位の定型でありまして、是が發達して棟數が增し、房室の數が多くなつて來ましても、元の根幹をなす定型は變らない。唯その規模が大きくなるか、建物の數が多くなるか丈けの話であります。そしてこの原則が今日迄徹底して居るといふ珍現象は世界中何處にもない。生活狀態の時々刻々變るに連れて、プランも時々刻々に變るべき筈の住宅が、數千年以來今日迄同じ型のプランを守つて居ると云ふことは實に不思議千萬なことである。是を見ても數千年前の太古の思想が連綿として今日に續いて居ると云ふことが明らかである。

今日の支那の住宅が、恐らくは周の時代から少しも變らないのではないかと思はせられることがあります。それは少し私の臆測が强過ぎるかも知れませぬが、論語を讀んで見ますと、其の中に斯う云ふことが書いてあります。それは孔子の弟子の

せられることがあります。それは少し私の臆測が強過ぎるかも知れませぬが、論語を讀んで見ますと、其の中に斯う云ふことが書いてあります。それは孔子の弟子の

第十圖

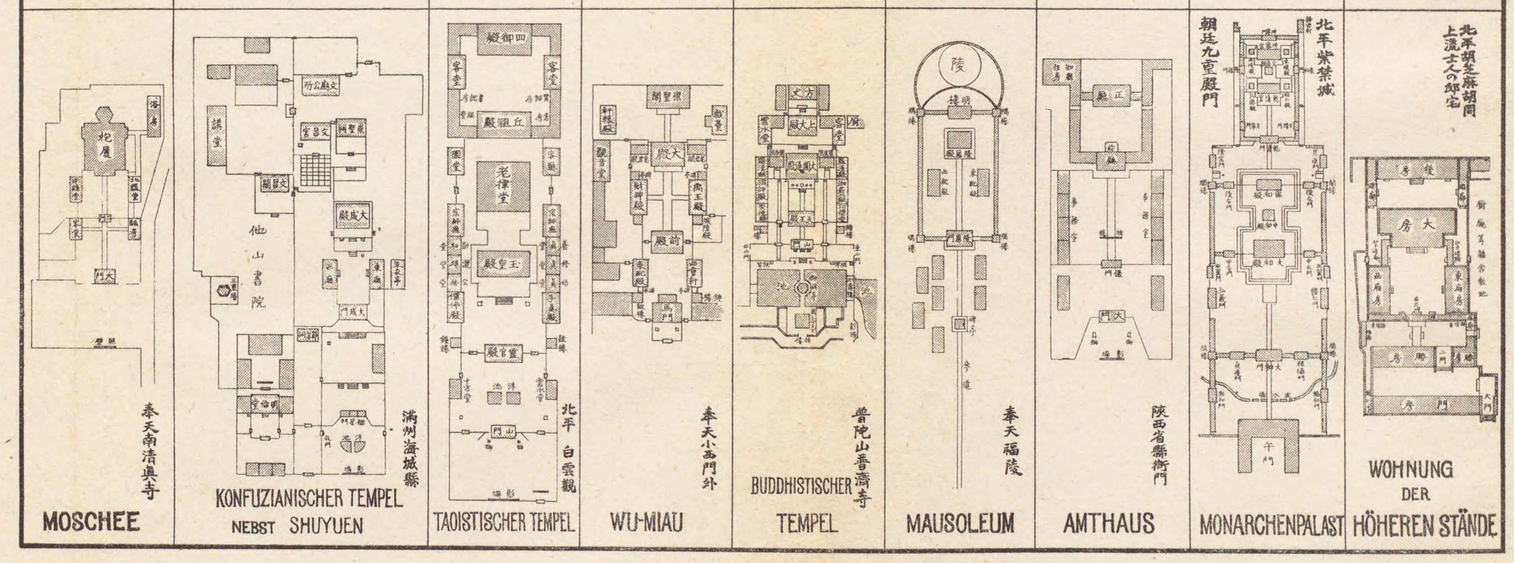
型定の家住



第九圖

支那建築平面比較圖

VERGLEICHENDE LAGEPLÄNE DER VERSCHIEDENEN CHINESISCHEN BAUTEN



冉伯牛が病氣で將に死なむとする時に孔子が見舞に行かれた時の記事で、『伯牛有疾。子問之。自牖執其手。曰。亡之。命矣夫。斯人也。而有斯疾也。斯人也。而有斯疾也』と書いてあります。この文句に依つて、伯牛の家のプランが、今日の普通の家のプランと同型であると想像されるのです。第十圖は伯牛の家の圖とも見られるのでその大房は卽ち主人の居る所、東廂房、西廂房が家族の居る所。中流家庭でも是だけあれば住へるのです。各房は長方形の獨立の棟で之を三室に區劃し、その入口は中央にある。中央の室は應接室であり、左右の室は居間と同時に寢室であり、寢床や讀書用の机、文房具などが設備されて居るのです。伯牛もこの型の家に住ひ、大房の左右何れかの室に病臥して居たのです。但し一般の習慣として、病人は室の北窓（房室は南面と見て）の下に寢ることになつてゐたので、伯牛もその例に倣つて北窓の下に横臥して居たのでした。そこで孔子が見舞に來られると云ふ譯ですが、孔子が病室に入つて伯牛に會ふとすれば、孔子が北を向いて挨拶をすることになる。門弟の伯牛が南面し、恩師の孔子を北面させて會見すると云ふことは禮に適はないと云ふので伯牛の病軀を南窓の下に移し、孔子は南面し伯牛は北面して挨拶を交換

する様に準備したのでした。軈て孔子が訪問に來ましたが、部屋の内に入つては家の人がさぞ迷惑するだらう、大病人のある中でさう云ふことは遠慮したが宜いと云ふ考で、孔子は病床までは入られず、大房の南窓の外に立つてその窓から手を差し入れ、寢た儘で起上れなかつた伯牛の手を執て、決別の握手をして歸られたのです。さうすると、入口の左右には窓があり、其の窓の高さも、人が立ちながら外から手を差伸べて病床の上の人と握手をするに丁度よい程度の位置にあつたと云ふことも分ります。是は一つの例でありますけれども、其の他の事も、之に因む文獻から考へれば、當時の家の有樣を想像するに難くないのでありませう。この種の小中住宅の完全に發達したのが詰り北京城であります。其の規模の構成法は申す迄もなく眞中に太極を意味する中心殿堂があつて、さうして陰陽に相當する堂宇を左右に配置し、太極陰陽三つが揃はなければならぬのであります。此の構成は日本でも長く殘されて居るのです。支那文化の輸入當時より、今日迄も此の法則が日本に殘つて居る。其の例を擧げますれば、例へば宮殿に於ては桓武天皇の御造營にかゝる大内裡の中心建築が大極殿で、支那の名稱をそつくり借用したものですが、太極は星辰

に配當すれば北極星でありますから、天の中心、天の正北、天の最高の位置に在て南面して居ると認められ、住宅に譬ふれば卽ち大房に當るのです。さうしてその東に陽の建築西に陰の建築を置かなければならない。東の陽の色は青で西の陰の色は白でありますから、桓武天皇は太極殿の東南に蒼龍樓、西南に白虎樓を御造りになつた。卽ち全然支那の型であり、その名も支那に倣つたのです。

それから大内裡の中に内裡の一郭があります。その中心建築は紫宸殿であります。あれが矢張り太極殿と同じく唐の宮殿の名を襲用したのであります。紫宸殿の紫宸は星の紫微でありまして、之に就ては文獻に甚だ難解な説明が書いてありますが、結局北極の近くに在る一群の星で、北斗星の北にあると曰はれ、北極星と同じものでは無いにしても、均しく天の最高位にある尊い星と見て差支ないのです。卽ち紫宸殿を中心とする内裡の外郭の東には陽の春を現はす建春門、西には陰の秋を現はす宜秋門があるのです。今日の京都御所の紫宸殿の前に廣場がありまして東に陽の日華門、西に陰の月華門があるのです。この系統につながる寢殿造は平安朝時代を通じて最も榮へたので、勿論日本思想と日本趣味とに由て處理されて居る

のですが、大體のプランは矢張り支那的であり。中心の寢殿を主とし、東西の「對の屋」以下整然として備はつて居ますが、寢殿の北の「對の屋」は夫人の居室と定められてゐるので、後世までも夫人を「北の方」と呼んでゐます。夫は北は陰の極に當るから女人の居室とされたのであります。

日本の建築は、支那から色々なことを取り入れたのですが、その中には良いこともあるし良くないこともあるのです。建築に關して最も惡いことの一つは家相の問題だと思ひます。それも矢張り陰陽五行說から起つた迷信であります。就中今日でも厄介な問題となつて居るのは鬼門の事でせう。私は支那の家相の本も讀んでみましたが、最も古い權威のある家相の書は黃帝宅經であると思ひますが、これに鬼門のことが書いてあります。これは甚だ難解なもので、意義の不可解な點がありますが、方位に於て西北を天門、東南を地門、西南を人門、東北を鬼門といひ、鬼門を犯せば災害があるといふのであります。山海經に據れば、東北數萬里の地に度朔山といふ山があり、大なる桃の樹があつて蟠屈すること四十里、其の卑枝が東北に向ひ、萬鬼玆に出入す。此の鬼類を統御する二神を神荼鬱壘といふ。卽ち東北を鬼門

として之を避くる所以なりと曰ふのです。これ丈けの說明では鬼門の恐るべき所以はよく分りませぬが、或る支那の學究の說明に據れば、元來東北は陰から陽に變轉する大切な點である、この點で蹉跌すると陰陽循環が圓滑に行かぬから、玆に何等かの恐るべき現象が生ずる。故に鬼門を恐るのであるといふ。成る程陰から陽に移る點に障礙が有つて脫線すれば陽は來らず、陰陽五行の循環が滅裂する道理であるが、これが何故に特に家のプランに干涉するかは一切說明されて居らぬ。家相の問題は今議論する必要はないと思ひますから、この邊で止めて置きますが、兎に角家のプランに由て一家の禍福吉凶が左右せらるゝといふのは、一部には光線、空氣等の自然科學方面の合理的な根據もありますが、大部分は道敎と陰陽五行說から出た迷信であると云ふことを斷言して置き度いと思ひます。なは序に申上げ度いことは、日本に陰陽五行說の傳來したのは何時頃からであるかはよく知りませぬが、奈良朝には旣に陰陽道と云ふものがありまして、平安朝に入つては陰陽博士安倍晴明などの專門家もありました。其の後江戶時代に一般に普及し、殊に文化文政頃から、家相、人相などの迷信が流行し、更に方位、九星など種々雜多のものが續々出て來

たのは、畢竟時勢に伴なう一種の民衆心理の現はれであるとして考ふべきことゝ思ひます。

八、結語

段々時間も迫りましたから、結語として最後の感想を簡單に申し述べます。結局私の考は、支那の建築藝術と云ふものは、主として道教思想を根本とし、夫に敬天思想や陰陽五行説などを結びつけて考案したものであるから、今日の學問や技術を以て律するならば、そこに不合理があり不都合であると見られる點が多々有ると思ひます。併し藝術に關する限り、今日の學術を標準として直ちにその價値を判斷してはならぬと思ひます。己れを以て人を律することは無理であり、自家の理論を以て他の信念を品隲するは危險であります。日本の藝術を最も善美なりと前提して支那の藝術を比較批判しては正鵠を得難いと思ひます。

私は、支那人が日本人の思ひも寄らぬ珍案妙想を以て、何の屈托も頓着もなく、意に委せて創作して行くのを見て、彼等は實に幸福な人間だと考へさせられるのです。と云ふのは、彼等の信仰する道教其のものは、理窟に合はぬ間違つた宗教かも知れませぬが、それは別問題として、道教と云ふものにすつかり浸り込んで、良い氣持でその内に融け込んで、さうして一切算盤珠から割り出した數理などにお構ひなく、無邪氣にのん氣にやつて行けるといふ事は幸福であると思ひます。日本人ではそうは行かない　何か一ッの考案を試みるにも、是は理窟に合はぬ樣だ、斯んなことをしたら人に笑はれるだらう、いや、これでもまだ面白くない、これでもまだ不充分だなどゝ四苦八苦の中から絞り出した考案に碌なものは無いものです。美しい藝術は明朗な頭から自然に湧き出るもので、神經衰弱の頭からは出ないものです。支那藝術はのんびりと無邪氣に無造作にやつた所に或る種の面白味が出て來るのだと思ふのです。之に反して、私は歐羅巴の好い工藝品などを見て精巧だとは思ひますが、何となく冷硬な氣分を感じます。普通の日常生活用の藝術的製品でも、工藝品といふよりは寧ろ機械工業品といふべき調子のものが多く、鋭利、强烈の感があり、餘りにハッキリし過ぎるといふ難點があります。之を描線に譬へると、西洋の工藝品は機械で引いた正しい數學的の線の如く、支那の工藝品は毛筆で書いた自

在畫的の線の如くであると言へる樣であります。結局西洋の藝術は理智に傾いて刺激性が强く、支那の藝術は茫漠として無頓着の結果、往々トボケた處があり滑稽味もあるが、そこに親しみ易い處がある樣に感じます。私は支那の古今の藝術を見て先づ第一歩に何となく親しみを感じます。それは私の特殊の性癖であるかも知れませぬが、元來東洋藝術は情の藝術であり、西洋の藝術は理の藝術であることは周知の事であり、而して支那藝術は大體に於て東洋的であるから、當然日支藝術の間に何等か一脈相通ずるものがあるが爲だと考へらるのであります。

本講話の劈頭に申しました通り、凡そ完全無缺な頭を有つてゐる民族は世界中何處にもない。日本人の頭も、その或る一部が發達して、他の一部は空疎であるかも知れませぬ。支那人の頭は、日本人の發達してゐる方が空疎で、日本人の空疎である方がうんと發達して居るかも知れない。結局日支共に多少共片輪であるかも知れない。その足りない所は無意識的に之を補ふことを要求するのが自然の配劑であります。鹽辛い物を食つたあとで水を要求するのと同じ生理的現象であります。支那人の作つた變な物が非常に面白いと感ずるのは日本人にさう云ふ所が缺けて居るから、無意識に之を要求して居るので、是は面白いと言つて歡迎するのではないか。若し日本人と同じやうな頭の外國人が、日本人の作品と同じやうなものを作つたとすれば、日本人は少しも面白いと感じない。日本人が外國人の頭になつて、外國人と同じものを作つて見せても外國人は之を歡迎しない。

支那人の頭は日本人の頭とは非常に違つて居る所があるから、日本人から見れば彼の作品には一種獨特の味が有ると感ずる。夫が必しも優秀でなく巧妙でなくとも兎に角新奇であり妙味があるとして歡迎するのであると思ひます。勿論今日の支那の藝術は頗る不振の狀態に在ります。が、既往に遡つて見ると、周漢時代の古銅器、六朝及び唐の彫刻、繪或は書、宋以後の瓷工及び各種の雜工、それは時代に依つて色々違つては居りますけれども、實際優秀巧妙なものが少からず、中には慥かに世界無比として誇るべきものもあるのであり、而して其成功の祕訣の裡には殆ど常に道教的素因が或る程度に含まれて居るのですから、支那に取つては道教は必要不可缺のもので、之を奪ふことは出來ない實情にあります。この特殊の消息を完全に研究することは、世界の謎と謂はる支那の國民性、その文化の性質、その他一切の支

那に關する秘庫を發く鍵を得る所以でありませう。且つ又支那藝術の眞相を闡明し、その攝るべきを攝て、我が國の藝術の進歩に資することは極めて有意義の事でありませう。是は單り建築藝術に就てのみならず、總ての他の方面に對しても同樣でなければならぬと痛感致す次第であります。是で私の御話を終ります。

附錄

本會設立月日

大正七年八月八日

本會寄附行爲

第一章　總則

第一條　男爵牧野伸顯平山成信ハ赤星鐵馬ノ寄附ニ係ル金壹百萬圓ヲ以テ財團法人ヲ設立ス

第二條　本財團法人ハ啓明會ト稱ス

第三條　本會ハ公益ニ資スル爲メ左ノ事業ヲ行フヲ以テ目的トス

一　特殊ノ研究調査著作ヲ助成シ發明發見ヲ奬勵スルコト

一　必要ニ依リ本會自カラ專門家ニ依屬シテ前項ノ事業ヲ爲スコト

一　外國ニ於ケル同種ノ事業ヲ紹介シ又ハ著作ヲ反譯スルコト

一　本會ノ目的遂行ノ爲メ必要ナル講演ヲ開キ又ハ出版ヲ爲スコト

第四條　本會ノ事務所ハ之ヲ東京市麴町區丸ノ内一丁目六番地壹ニ置ク

第五條　本會ノ事業年度ハ毎年一月一日ヲ以テ始マリ十二月三十一日ヲ以テ終ル但初年度ハ本會設立ノ日ヲ以テ始マル

第六條　本寄附行爲ノ條款ハ評議員會ノ決議ヲ經且主務大臣ノ認可ヲ受ケテ之ヲ變更スルコトヲ得

第二章　役員

第七條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一　理事長　一名

一　理事　五名

内一名ヲ常務理事トス

一　評議員　十五名

第八條　理事長及理事ハ評議員會ノ決議ヲ以テ評議員中ヨリ之ヲ推薦ス但本會設立ノ際ハ寄附者之ヲ推薦ス

理事長ハ本會ヲ代表シ理事會及評議員會ノ議長ト爲ル

理事ハ會務ヲ掌理ス

第九條　初度ノ評議員ハ寄附者之ヲ推薦シ缺員ヲ生シタルトキハ評議員會ノ決議ヲ以テ補缺ヲ爲ス

評議員ハ重要ナル會務ヲ審議ス

第十條　理事長及理事ノ任期ハ三年トス但重任ヲ妨ケス

第十一條　本會ニ必要ナル事務員以下ハ理事長之ヲ任免ス

第三章　顧問及委員

第十二條　本會ニ顧問若干名ヲ置ク

顧問ハ評議員會ノ決議ヲ以テ之ヲ推薦ス但本會設立ノ際ハ寄附者之ヲ推薦ス

第十三條　顧問ハ本會ノ諮問ニ應シ且隨時理事會及評議員會ニ出席シテ意見ヲ開陳スク

第十四條　本會ハ必要ニ應シ各種ノ委員ヲ置ク

委員ハ理事長之ヲ囑託ス

第四章　會　議

第十五條　會議ヲ分チテ理事會及評議員會トス

第十六條　理事會ハ理事長隨時之ヲ召集ス

第十七條　理事會ノ議事ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ決シ可否同數ナルトキハ議長ノ表決ヲ以テ之ヲ決ス

第十八條　評議員會ハ通常及臨時トス

通常評議員會ハ毎年十二月及三月ヲ以テ理事長之ヲ召集シ本會ノ豫算及決算ヲ議定ス

臨時評議員會ハ理事長必要ニ應シ之ヲ召集ス

評議員五名以上ヨリ會議ノ目的タル事項ヲ示シテ請求スルトキハ臨時會ヲ召集スルコトヲ要ス

第十九條　左ノ事項ハ評議員會ノ議ニ付スルヲ要ス

一　寄附行爲ノ變更

一　本會諸規則ノ制定變更

一　本會ニ於テ施行スヘキ事業ノ決定

一　理事長及理事顧問ノ推薦

一　資産管理ノ方法

一　其他理事會ニ於テ評議員會ノ決議ヲ要スト認メタル事項

第二十條　評議員會ノ議事ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ決シ可否同數ナルトキハ議長ノ表決ヲ以テ之ヲ決ス但左ノ場合ニ於テハ評議員三分ノ二以上ノ出席アリ且出席者三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

一　寄附行爲ノ變更

一　不動産ノ買入

一　理事長及理事ノ推薦

第五章　資　産

第二十一條　本會ノ資産ハ左ニ掲クルモノヲ以テ之ヲ組成ス

一　寄附財産金壹百萬圓

一　本會ノ事業又ハ財産ヨリ生スル收益

一　其他本會ニ於テ取得スル財産

第二十二條　本會ノ財産ハ國債證券又ハ確實ナル有價證券ヲ買入レ若クハ郵便官署又ハ確實ナル銀行ニ預ケ入ルルモノトス但特別ノ事情アル場合ニハ評議員會ノ決議ヲ經テ不動産ヲ買入ルルコトヲ得

第六章　會計

第二十三條　本會ノ收支ハ毎事業年度ノ末日ヲ以テ之ヲ決算ス

第二十四條　本會ハ事業年度毎ニ財産目錄貸借對照表及事業報告書ヲ作リ決算ト共ニ評議員會ニ提出スヘシ

本會職員名簿

（イロハ順）

顧問　伯爵　牧野伸顯

理事長　侯爵　大久保利武

常務理事　鶴見左吉雄

理事

伯爵　樺山愛輔

工學博士　長岡半太郎

永原伸雄

小山松吉

評議員

工學博士　伊東忠太

侯爵　大久保利武

伯爵　樺山愛輔

工學博士　田中芳雄

鶴見左吉雄

文學博士　辻善之助

理學博士　長岡半太郎

永原伸雄

醫學博士　長與又郎

物故職員

自大正七年八月 至昭和四年九月	理事長、評議員 男爵	平山成信
自大正七年八月 至昭和七年十月	理事、評議員	小松謙次郎
自大正七年十一月 至昭和八年十二月	理事、評議員	山之内一次
自昭和四年十月 至昭和十四年六月	理事、評議員	三上参次
自昭和十四年八月 至昭和十七年八月	理事、評議員	串田萬藏
自大正七年八月 至大正九年十二月	評議員	坂田貞一
自大正七年八月 至昭和二年十二月	評議員	柳澤政太郎
自大正七年八月 至昭和八年十月	評議員	新渡戸稲造
自大正七年八月 至昭和九年六月	評議員	古在由直
自大正七年八月 至昭和十七年四月	評議員	高松豐吉
自大正七年八月 至昭和十年十月	評議員	宇野哲人
自大正七年八月 至昭和十七年一月	評議員	山田三良
自大正十年十月 至昭和九年十月	評議員	松浦鎮次郎
自大正九年八月 至昭和十二年八月	委員、評議員	小山松吉
自大正九年六月 至昭和二年六月	委員、評議員	斯波忠三郎
自大正九年六月 至昭和二年六月	委員	安藤廣太郎
自大正七年八月 至昭和三年三月	評議員	三宅秀
自大正七年八月 至昭和三年三月	評議員	櫻井錠二
自大正九年八月 至昭和二年六月	委員、評議員	本多靖三
自大正九年六月 至昭和六年九月	委員	芳賀矢一
	評議員	坪井九馬三
	評議員	三宅秀
	評議員	三宅秀
	評議員	啓明會編
	評議員	啓明會編
	評議員	啓明會編

本會出版物

一、依囑著述

(一)最近政治外交史 上、中、下 各五圓 富山房

(二)衞生長壽法 貳圓五拾錢 富山房

二、記念出版

(一)創立十年記念講演集 (非賣品) 財團法人啓明會編

(二)創立十年記念展覽會圖錄 (非賣品) 財團法人啓明會編

(三)創立二十年記念「日本文化最近二十年誌」(參圓)(送料二十二錢) 財團法人啓明會編

(四)創立二十年記念會誌 (壹圓五拾錢)　財團法人 啓明會編

三、紀　要

(一)往來物目錄 (缺本)　理學博士 岡村金太郎編

(二)英國博物館所藏スタイン寫本寫眞帳　文學博士 矢吹慶輝編

(三)支那財政の眞相と其革新策に就て　經濟學博士 木村增太郎報告

(四)支那の關稅改正問題 (缺本)　經濟學博士 木村增太郎報告

(五)假名の研究 (貳拾錢)　文學博士 大矢透報告

(六)日本産業推移の經路　米國 モーリス・ホーランド君報告摘要

(七)米國少年裁判所の研究　少年保護司 芳川顯雄報告

(八)世界大戰の獨逸教育に及ぼしたる影響 (缺本)　獨逸 フリツツ・ケルレルマン述

(九)支那と日本とに於ける古代と近代 (缺本)　倫敦大學教授 アーノルド・ジエイ・トオインビー述

(一〇)佛、獨、白諸國農村の瞥見 (第二版) (壹拾錢)　駒澤大學教授 笠森傳繁報告

(一一)ハイゼンベルグ量子論諸問題(第三十三回講演會速記) (缺本)　理學博士 仁科芳雄述

(一二)農村問題と教育との一考察 (缺本)　武藏高等學校教頭 山本良吉述

(一三)日本モンロー主義と滿洲 (貳拾錢)　獨逸國間官伯爵 金子堅太郎述

(一四)英國救貧史研究 (缺本)　早稻田大學講師 小島幸治報告

(一五)波斯關係圖書目錄 (缺本)　農學博士 田中於蒐彌編述

(一六)村塾教育の時代的使命 (缺本)　駒澤大學教授 小野武夫述

(一七)農村更生の礎石としての農村女塾 (缺本)　醫學博士 笠森傳繁述

(一八)水代謝の生理及び病理に關する實驗的研究 (拾錢)　米國 ヘルバート・ブルツカー チヤールス・シモーア 述　小杉虎一報告

(一九)米國「エール」大學の二大新施設 (貳拾錢)　文學博士 中村孝也述

(二〇)國史教育の改善 (缺本)　青木利三郎編

(二一)日本の現勢 (缺本)　伯爵 樺山愛輔述

(二二)現今に於ける米國の教育 (拾五錢)　濱水博 小池共譯

(二四)Present day Japan (壹圓) (郵稅六錢)

四、講演集

(一)｛法律上より見たる國際聯盟／經濟方面より見たる國際聯盟｝（缺）

(二)國勢の近況（缺）

(三)歐洲の最近政治運動の經過及因由（缺）

(四)スタイン氏發見の敦煌畫に就きて（缺）

(五)印度蒙古王室の古樂器（缺）

(六)支那學術史調査報告（缺）

(七)唐代宗教の音樂に就きて（缺）

(八)花卉物（徳川時代庶民教育資料）に就きて）（缺）

(九)歐洲の近況（缺）

(一〇)宗教の理想と實際（缺）

(一一)新疑メソポタミヤ方面戰鬪（缺）

(一二)ブラジル移民に就きて（缺）

(一三)敦煌出土古寫本佛教に就きて（缺）

(一四)｛現存史蹟／古代印度の現狀／古印度の藝術に就きて／印度語學／印度の音樂に就きて｝（缺）

(一五)｛新土耳古國の建設／土耳古の憲法特徴｝（缺）

(一六)滿州金樂に就きて（缺）

(一七)｛眼前の東人種問題／アイヌ研究の現狀／アイヌの住居と物質的のアイヌ品陳列標／白老コタンアイヌの住居（活動寫眞）／アイヌ住居の變遷／アイヌ語の特質｝（缺）

(一八)我が國の古樂古樂に就きて（缺）

(一九)歐洲に於ける勞働問題の趨勢（缺）

日本學術會議理事	深山	二
文學博士	高	二
東大助教授	今井	楠順
文學博士	瀧田	精
		時
文學博士	常盤邊	尚大
理學博士	岡田	雄
帝工學部記官	石井	銀
工學博士	伊東	忠
總督府	繼田	榮
北海道帝國大學記官	富田	愛
文學博士	矢吹	慶輝
		英端
		夫
		一三

東京帝國大學	柳田國男	一三
工學博士	伊東忠太	一三
	柳宗悅	一三
	倉田百三	一三
	波多野精一	一三
	恩賜財團	一三
	紡績	一三
貴族院議員	藤山雷太	一三
東京帝國大學	柳田國男	一三
文學博士	金田一京助	一三
理學博士	八木三郎	一三
理學博士	田中館愛橘	一三
十勝アイヌ	伏根弘三郎	一三
醫學博士	チョンチラ・ペー	一三
文學博士	高野辰之	一三
前國際勞働事務局長	前田門多	一三

(二〇) 支那と外國 — 支那の存在と其利益 (談本)
(二一) 滿蒙の近況 (談本)
(二二) 支那最近の政情 (談本)
(二三) 國際經濟會議に就きて (談本)
(二四) 滿蒙に於ける人類學上の研究に就きて (談本)
(二五) 日本の立場より見たる西洋美術 (談本)
(二六) 南洋に於ける日本國民對外活動に就きて (談本)
(二七) 東洋繪畫の系統 — 新發見品に就きて (談本)
(二八) 朝鮮農業に就きて — 鮮産出土品に就きて (談本)
(二九) 西洋美術に於ける東洋的要素 — ベルシヤ旅行談 (談本)
(三〇) 歐米觀察談 (談本)

貴族院議員	男爵	藤村義朗
文學博士		黑板勝美
東京美術學校教授		矢代幸雄
文學博士		倉橋藤治
工學博士		鎌倉芳太郎
文學博士		伊東忠太
東京帝國大學教授		黑板勝美
文學博士		矢代幸雄
東京美術學校教授		矢代幸雄
文學博士		鳥居龍藏
前國際聯盟會議代表		志立鐵次郎
元湖南新報社長		笹川茂信
文學博士		矢野一三
文學博士		坪井九馬三

(三一) 西洋美術の系統 — 新發見品に就きて (談本)
(三二) 國際聯盟に就きて (談本)
(三三) 滿蒙の經濟的價値 (談本)
(三四) 滿蒙の經濟的開發 — 滿鐵の開發に就きて (談本)
(三五) 最近の滿蒙 (談本)
(三六) 産業の合理化 (談本)
(三七) 最近の滿蒙 (談本)
(三八) 歐米觀察談 (談本)
(三九) 歐米觀察談 (談本)
(四〇) 支那の存在と其利益 — 支那と外國 (談本)
(四一) 滿蒙の近況 (談本)
(四二) 支那最近の政情 (談本)
(四三) 國際經濟會議に就きて (談本)
(四四) 滿蒙に於ける人類學上の研究に就きて (談本)
(四五) 日本の立場より見たる西洋美術 (談本)
(四六) 南洋に於ける日本國民對外活動に就きて (談本)
(四七) 東洋繪畫の系統 — 新發見品に就きて (談本)
(四八) 朝鮮農業に就きて — 鮮産出土品に就きて (談本)
(四九) 西洋美術に於ける東洋的要素 — ベルシヤ旅行談 (談本)
(五〇) 歐米觀察談 (談本)

侍從武官	陸軍少將	川島信太郎
經濟學博士		村增太郎
海軍少將		南郷次郎
農商務省工務局長		吉野信次
法學博士	特命全權大使	長岡春一
前國際勞働會議代表		富田愛次郎
航空研究所長男爵		坂田忠三郎
美術研究所所員	東京帝國大學教授	青山新
横濱高商校長		田尻常雄
工學博士		伊東忠太
國寶保存會委員		奥田誠一
東京帝國大學教授		六角紫水
帝國美術院會員		香取秀眞
東京高等工業學校		安田靫彦

(五一) 支那文樣の特質 — 支那金工に就きて
(五二) 支那淡藝の發達とその趣味 (四部刊)
(五三) 支那陶器の鑑賞 — 支那建築と其の裝飾 (貳部五種)
(五四) 最近歐米諸國相續政策の現況と國債政策制度の改革 (談本)
(五五) ペルシヤを中心としたる西方亞細亞の美術 (十五種)
(五六) 國際聯盟の研究 — 新聯盟規約の研究 (談本)
(五七) 國際聯盟の研究 — 國際勞働會議の研究 (談本)

法學博士	特命全權大使	長岡春一
農商務省工務局長		吉野信次
海軍少將		南郷次郎
經濟學博士		村增太郎
侍從武官	陸軍少將	川島信太郎

(四〇)支那國民性とその染織
支那工藝に關する文獻　(參拾錢)

(四一)東洋文化の世界的意義　(第二版)　(貳拾五錢)
(四二)國民思想に關する一觀察　(缺本)
(四三)金本位の作用、殊に金融との關係　(貳拾五錢)
(四四)民法改正と婚姻問題　(貳拾五錢)
(四五)儒教の泰西思想に及ぼせる影響　(缺本)
(四六)古典の趣味　(缺本)
(四七)滿洲支那領土說の批判と滿洲國の建國　(貳拾五錢)
(四八)滿洲の文化と遺跡の史的考察　(缺本)
(四九)日本精神の內容　(缺本)
(五〇)儒教思想と政治問題とに關する史的考察　(貳拾錢)
(五一)世界に於ける日本美術の位置　(五拾錢)

東京高等工藝學校教授　鹿島英二
工學博士　關野貞
東京美術學校助教授　田邊孝次
金雞學院學監　安岡正篤
文學博士　三上參次
法學博士　山崎覺次郎
法學博士　男爵　穗積重遠
政治學博士　五來欣造
宮中顧問官　井上通泰
文學博士　矢野仁一
工學博士　伊東忠太
文學博士　高楠順次郎
文學博士　市村瓚次郎
美術研究所長　矢代幸雄

(五二)朝鮮工藝の東洋文化に於ける地位
朝鮮古陶器の研究に就きて　(貳拾五錢)
(五三)日本建築の變遷　(缺本)
(五四)日本精神の眞義と歸趨　(貳拾五錢)
(五五)文化の原動力とその轉機の問題　(貳拾五錢)
(五六)氣象の研究と其の應用　(缺本)
(五七)丙午迷信の科學的考察　(參拾錢)
(五八)建築に現れたる日本精神　(缺本)
(五九)社會事業と佛教　(貳拾五錢)
(六〇)印度文化の大觀　(貳拾錢)
(六一)文化史上より觀たる古代ギリシヤ人と日本人　(貳拾五錢)
(六二)熱河遺蹟の建築史的價値　(參拾錢)
(六三)四川省の眞相に就いて　(貳拾錢)
(六四)世界經濟の動向と日本の金融　(貳拾錢)
(六五)醫學上より見たる國民の保健問題　(缺本)

朝鮮陶器研究會理事
彩霞會幹事
朝鮮陶器研究會研究員　倉橋藤治郎
淺川伯教
工學博士　伊東忠太
金雞學院學監　安岡正篤
文學博士　姉崎正治
理學博士　藤原咲平
東洋考古學會幹事　小林胖生
工學博士　伊東忠太
文學博士　辻善之助
慶應大學教授　野口米次郎
文學博士　村川堅固
工學博士　伊東忠太
海外社々長　神田正雄
中央大學講師　青木得三
醫學博士　鈴木梅太郎

(六六)醫學と人生　(貳拾五錢)　醫學博士　林春雄

(六七)歐米諸國に於ける土耳産業の現勢　(缺本)　貴族院議員　子爵　土岐章

(六八)老人病の話　(貳拾五錢)　醫學博士　入澤達吉

(六九)物價の理論と實際　(貳拾五錢)　經濟學博士　牧野輝智

(七〇)綿、羊毛其他數種の天然物の代用品に就きて　(貳拾五錢)　工學博士　厚木勝基

(七一)微生物と人生　(貳拾五錢)　醫學博士　宮嶋幹之助

(七二)日本に於ける學術の發達　(缺本)　理學博士　櫻井錠二

(七三)明治維新と國民精神　(缺本)　貴族院議員　德富猪一郎

(七四)我國現下の資源問題と其の將來　(貳拾五錢)　企畫院調査部長　植村甲午郎

(七五)國民體位の趨勢と其の對策　(缺本)　厚生省體力局長　兒玉政介

(七六)支那の文化と其の振興　(貳拾五錢)　大正大學講師　秋山謙藏

(七七)日本人の對外發展と倭寇　(貳拾五錢)　工學博士　伊東忠太

(七八)新獨逸文化と日本　(貳拾五錢)　水野梅曉

(七九)現下の職業問題　(貳拾錢)　厚生省農業局長　熊谷憲一

(八〇)森林と治水　(貳拾五錢)　林學博士　諸戸北郎

(八一)西藏文化と我國との關係　(缺本)　文學博士　河口慧海

(八二)新支那の指導精神　(貳拾五錢)　文學博士　宇野哲人

(八三)滿支の文化工作　(貳拾五錢)　法學博士　下村宏

(八四)老莊研究の現代的意義　(貳拾五錢)　文學博士　小柳司氣太

(八五)滿支の文化工作(承前講)　(貳拾五錢)　法學博士　下村宏

(八六)國民體力と民族問題　(參拾錢)　醫學博士　厚生技師　古屋芳雄

(八七)歐州外交の史的考察と現勢　(參拾錢)　法學博士　林毅陸

(八八)日本製鐵業の現在及び將來　(參拾錢)　日本製鐵會社長　中松眞卿

(八九)道教思想と支那建築藝術　(參拾錢)　工學博士　伊東忠太

(九〇)外國文化の移入と其の發展　(參拾錢)　文學博士　高楠順次郎

補助成績出版物

(一)本朝文粹註釋 上下　三圓五十錢　京都內外出版會社　柿村重松
(二)爪哇史　圓　岩波書店　松岡靜雄
(三)古語拾遺(英文)　圓　明治聖德記念學會　文學博士 加藤玄智 星野勝男 日子四郎
(四)校本萬葉集　三圓　萬葉集刊行會　文學博士 佐々木信綱
(五)更科日記錯簡考　十圓　目黑書店　東京高等師範學校教授 玉井幸助
(六)日華大辭典(續刊)　十圓　京都內外出版會社　服部操
(七)西日辭典　四圓　右文社出版部　日墨協同會社
(八)アイヌ語辭典　十二圓　教文館　神學博士 ジョン・バチラー
(九)支那財政論　六圓五十錢　大阪屋號書店　農學博士 木村增太郎
(一〇)大唐西域記(紀元七世紀)東南印度諸國ノ研究　六圓　森江書店　高桑駒吉
(一一)蘭領東印度(遞信省ヨリ見タル)　五圓五十錢　財政經濟學會　增井貞吉
(一二)德川制度史科　十圓　六合館　小野清
(一三)蠑螈と山椒魚　十圓　丸善書店　田子勝彌

(一四)アイヌユーカラの研究　一、二共　二十五圓　東洋文庫　文學博士 金田一京助
(一五)畫の教育學　三圓八十錢　刀江書院　畫家 上阪雅之助
(一六)百世の師・孔子　一圓二十錢　玄黃社　貴族院議員 赤池濃
(一七)續日本名家四書註釋全書(論語解、學庸篇、讀孟叢鈔)　東洋圖書刊行會　東洋大學講師 關儀一郎
(一八)サンドロ・ボテッイチエリー　約二十五圓　メディチイ・ソサイエテー　東京美術學校教授 矢代幸雄
(一九)日本その日〳〵　上・下共　三圓　科學知識普及會　石川欣一
(二〇)校訂・延喜式　上・下各　九圓　大岡書店　皇典講究所
(二一)後法興院記　上・下各　四圓　至文堂　文學博士 平泉澄
(二二)梵文金光明最勝王經　十圓　京都東方佛教協會　泉芳璟
(二三)朝鮮禪教史　五圓　春秋社　文學博士 忽滑谷快天
(二四)亞富汗斯坦　三圓八十錢　東亞同文會　田鍋安之助
(二五)工業史(明治化學工業篇、建築篇、電氣篇、土木篇、火兵・鐵鋼篇、鑛業篇、機械・地學篇、提要索引)　一百四十五圓　日本工學會　編纂委員長 工學博士 田邊朔郎
(二六)教育より論語新釋　三圓　啓明會　早稻田大學出版部　貴族院議員 赤池濃

(三九)補遺 **補遺全書** 下上・中・各 五冊 十冊 助語助動詞

(四〇)日本藥用植物圖譜 一百五十圓

(四一)リットン報告書全文解剖 八十錢 岩波書店

(四二)鎌倉室町時代之儀數 十圓 日本全史 叢書刊行會

(四三)繪畫製作及研究資料 四圓八十錢 岩波書店

(四四)莊園資料 上・下各 十四圓 帝都出版社

(四五)鳥類寫生圖譜第四集 第五十・第六表 三十三圓 鳥類寫生圖譜刊行會

(四六)日本鳥類目錄計數 六圓 丸善書店

(四七)エチオピア帝國 三圓五十錢 斯文書院

(四八)日本山林史 上・下共 二十圓 日本山林史刊行會

(四九)姓氏家系大辭典 全三卷各 十二圓 大姓氏家系辭典刊行會

(五〇)滿洲に露國の利權外交史 五圓五十錢 鳴右堂書房

(五一)室町時代庭園史 八圓 岩波書店

(五二)肥前風土記新考 三圓 巧人社

(五三)豐後風土記新考 三圓 同

(五四)西海道風土記逸文新考 三圓 同

(五五)(經國藏工部支)
玉石竹木工藝、建築繪畫、文機織、
條工篤、染織工藝、
條工篤、陶磁工藝、
全工篤、

(五六)大乘院寺社雜事記 全十二卷 五十四圓 潮改龍

(五七)明治財政經濟史料集成 全二十一卷 七十六圓 帝國書房

(五八)近世地方經濟史料 全十卷 六十圓 岩波書店

(五九)佛教大辭典 全五卷各 十八圓 鳴右堂

(六〇)鳴沙餘韻 上・下共 六十圓 岩波書店

(六一)繪畫の製作と鑑賞 本文・繪畫共 二十五圓 日本評論社

(六二)內外蒙古の橫斷 二圓八十錢 海外事情研究會

(六三)ヒポクラテス全集 上・下共 十八圓 岩波書店

(六四)鳥類寫生圖譜 下上 四三圓五十錢 鳥類寫生圖譜刊行會

(六五)臺灣風土記新考 七圓五十錢 岡書院

(六六)日本產蛙總說 十八圓四錢 波書

(六七)日本藥用植物圖譜 十圓 日本藥報社

(六八)リットン報告書全文解剖 八十錢 岩波書店

(六九)鎌倉室町時代之儀數 十圓 日本全史 叢書刊行會

(七〇)繪畫製作及研究資料 四圓八十錢 岩波書店

(七一)莊園資料 上・下各 十四圓 帝都出版社

(七二)鳥類寫生圖譜第四集 第五十・第六表 三十三圓 鳥類寫生圖譜刊行會

(七三)日本鳥類目錄計數 六圓 丸善書店

(七四)エチオピア帝國 三圓五十錢 斯文書院

(七五)日本山林史 上・下共 二十圓 日本山林史刊行會

(七六)姓氏家系大辭典 全三卷各 十二圓 大姓氏家系辭典刊行會

(七七)滿洲に露國の利權外交史 五圓五十錢 鳴右堂書房

(七八)室町時代庭園史 八圓 岩波書店

(七九)肥前風土記新考 三圓 巧人社

(八〇)豐後風土記新考 三圓 同

(八一)西海道風土記逸文新考 三圓 同

(六〇)(謠曲)古今名歌集　上・下共　十　四圓　丸善書店　森脇一郎　二
(六一)敍濟制度要義　(講要)　三圓五十錢　昭森社　太田文太郎　二
(六二)四川省綜覽　五　四圓　海外社　神田正雄　二
(六三)印紙稅法の史的考察と解釋　三　一圓　第一書房　中村秀吉　二
(六四)佛領印度諸國農村の考察　二　四圓　北隆館　笠原政雄　二
(六五)ロシア語の綜合研究　四　四圓　岩波書店　岩崎明雄　二
(六六)日本民族の政治哲學　四圓五十錢　松山堂　澤田謙　二
(六七)昭和農業經濟史　二圓八十錢　民協會　岡村常雄　二
(六八)南海古陶瓷　十　四圓　寶雲書房　東京帝國博物館　笠井清正　二
(六九)選擇古書解題　大　四圓　奥川書房　伊藤東涯　太田正法　二
(七〇)湖南省綜覽　八　四圓　海外社　中村秀吉　二
(七一)高野山文書　全十二卷、各部　五　四圓　文部省宗教局　田中常雄　二
(七二)日本の言葉と唄の構造　三　四圓　岩波書店　文學博士　柴田清雄　二
(七三)横井小楠　上・下共　十　五　四圓　明治書院　文學博士　崎山正法　二
(七四)シーボルト研究　六　四圓　岩波書店　醫學博士　日本獨逸協會　二
(七五)(文部省)日本產蠶類總誌(四)　十　七　四圓　養賢堂　理學博士　井上文雄　二
(七六)(農林)勸農事業概要　上・下共　十　四圓　大日本農會　農林省農務局　二
(七七)漁港論　二　四圓　大日本水產會　閣議決定　二
(七八)後醍醐天皇奉贊論文集　一圓八十錢　至文堂　武田孝雄　二
(七九)國家と經濟　三　四圓　日本評論社　日本學術振興會　二
(八〇)工學共通用語集　一圓二十錢　日本工學會　工學博士　波多野雄治　二
(八一)廣西省綜覽　十　四圓　海外社　神戸市役所　二
(八二)滿文老檔　二十五　四圓　岩波書店　文學博士　小倉進平　二
(八三)傑出人腦の研究(第一輯)　五圓五十錢　岩波書店　醫學博士　內務省衛生局　二

(八四)日本人繪卷物　(美術)　五　四圓　大日本雄辯會講談社　二
(八五)史料大成　全三十冊、一冊　三圓二十錢　內外書籍會社　文學博士　笹川種郎　二
(八六)中邊分別論釋疏　(哲學)　六圓三十錢　鹿野苑閣書房　文學博士　山口謙　二
(八七)同　(講座)　五圓二十錢　同　同　山口謙　二
(八八)唯識辨中邊論　六　四圓　同　同　山口謙　二
(八九)(謠曲)古今名歌集　上・下共　十　四圓　丸善書店　森脇一郎　二
(九〇)敍濟制度要義　(講要)　三圓五十錢　昭森社　太田文太郎　二
(九一)四川省綜覽　五　四圓　海外社　神田正雄　二
(九二)印紙稅法の史的考察と解釋　三　一圓　第一書房　中村秀吉　二
(九三)佛領印度諸國農村の考察　二　四圓　北隆館　笠原政雄　二
(九四)ロシア語の綜合研究　四　四圓　岩波書店　岩崎明雄　二
(九五)日本民族の政治哲學　四圓五十錢　松山堂　澤田謙　二
(九六)昭和農業經濟史　二圓八十錢　民協會　岡村常雄　二
(九七)南海古陶瓷　十　四圓　寶雲書房　東京帝國博物館　笠井清正　二
(九八)選擇古書解題　大　四圓　奥川書房　伊藤東涯　太田正法　二
(九九)湖南省綜覽　八　四圓　海外社　中村秀吉　二
(一〇〇)高野山文書　全十二卷、各部　五　四圓　文部省宗教局　田中常雄　二
(一〇一)日本の言葉と唄の構造　三　四圓　岩波書店　文學博士　柴田清雄　二
(一〇二)横井小楠　上・下共　十　五　四圓　明治書院　醫學博士　崎山正法　二
(一〇三)シーボルト研究　六　四圓　岩波書店　醫學博士　日本獨逸協會　二
(一〇四)日本產蠶類總誌(四)　十　七　四圓　養賢堂　理學博士　井上文雄　二
(一〇五)(農林)勸農事業概要　上・下共　十　四圓　大日本農會　農林省農務局　二
(一〇六)漁港論　二　四圓　大日本水產會　閣議決定　二
(一〇七)後醍醐天皇奉贊論文集　一圓八十錢　至文堂　武田孝雄　二
(一〇八)國家と經濟　三　四圓　日本評論社　日本學術振興會　二
(一〇九)工學共通用語集　一圓二十錢　日本工學會　工學博士　波多野雄治　二
(一一〇)廣西省綜覽　十　四圓　海外社　神戸市役所　二
(一一一)滿文老檔　二十五　四圓　岩波書店　文學博士　小倉進平　二
(一一二)傑出人腦の研究(第一輯)　五圓五十錢　岩波書店　醫學博士　內務省衛生局　二

昭和十五年六月十五日印刷
昭和十五年六月三十日發行

（定價金參拾錢）

發行兼編輯者　笠森傳繁
東京市大森區馬込町東一丁目一〇五ノ二

印刷者　吉田了太
東京市王子區神谷町一丁目四八二番地

印刷所　東京印刷株式會社
東京市王子區神谷町一丁目四八二番地

發行所　財團法人　啓明會事務所
（電話丸ノ内六八〇番）
東京市麹町區丸ノ内一丁目六番地壹
東京海上ビルディング五階五四六號

發賣所　北隆館
（電話自京橋至（56）七二四一七二四八）
東京市　京橋區　槇町三ノ三